



令和元年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究報告書



令和4年3月

長野県長野高等学校

『SDGs未来都市を創造するグローバルファシリテーターの育成』

長野県長野高等学校



研究開発プロジェクト名

長野グローバルプロジェクト (NGP事業)



地域とのつながりを強化したプログラムへ

課題研究

(地域での学びの促進)

国際交流

(世界との学びの促進)

外部との連携

(学びのネットワーク)

1年次

長野のグローバル戦略を探る
グループ研究
スキル養成・ローカルな視点

英語キャリアプロジェクトⅠ
米国リーダー研修(希望者)

コンソーシアム

地域との協働

2年次

SDGsから見た
長野のグローバル戦略
個人研究
グローバルな視点への移行

英語キャリアプロジェクトⅡ
台湾研修旅行

アカデミアネットワーク

学びの深化・拡大

3年次 (選択者)

グローバルアカデミア
高度な課題研究

グローバルアカデミア
国際会議(SDGs地方創生会議)

ローカルネットワーク

連携・協定・共有・伴走

グローバルネットワーク

国際交流の充実

成果

- 生徒の主体的に学ぶ意欲の向上
- 生徒の発信力の向上
- 新しい学びのネットワークの構築

課題

- 地域への、成果の還元
- 個別最適な学びのさらなる充実
- 生徒間の学びの交流の促進

NAGANO GLOBAL PROJECT

NAGANO GLOBAL PROJECT ~令和3年度~



SGH・NGP の学びを継続・深化・発展へ

本校が文部科学省の SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定を受けたのが平成 26 年度でした。その事業が終了した後、引き続き本事業の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」

[本校での事業名称は NGP（ナガノグローバルプロジェクト）] を令和元年度、指定頂き、事業の目的等が若干変わりましたが、SGH の趣旨・内容を継続して 8 年となりました。SGH が 5 年間、NGP が 3 年間という事業指定の期間が本年度いよいよ終了となります。

この 8 年間の実践は、本校に大きな財産をもたらしてくれました。その財産の一つ目は「国際交流」「グローバル」という側面です。本校が従前から実施してきた「米国情連研修」や「台湾研修」を指定事業の一翼を担う行事に再編成して、本校独自の学校設定科目「英語（キャリア）プロジェクト」などの特別のカリキュラム開発を行うことで、本校に新たな学びの方向性をもたらしました。財産の二つ目は「課題研究」「探究」という側面です。新たに「総合的な学習（探究）の時間」を学校設定教科として時間割の中に組み込むことで、生徒の皆さんが何らかの課題についてグループあるいは個人で研究をすることです。また、探究の過程でインタビュー実践やフィールドワーク等、実際の社会と接することでキャリア教育という側面もあったことや、地域の課題解決に向けて生徒自身も具体的な活動の一翼を担うという、実践を行う生徒も現れていることも指摘したいと思います。

このようなカリキュラム開発によって本校では長野県下でいち早く、全生徒が「探究」を実践することにより、進路実現においてよい影響があることに多くの先生方が気づき、その方向性については理解を深めるという状況にたどり着きました。今年度末に文部科学省指定事業は終了しますが、今後も現在行っている活動や事業をブラッシュアップしながら継続してだけでなく、今後はさらなる深化・発展をさせていきたいと考えています。具体的には課題研究や探究という側面を、より深化させていくことです。現状では、生徒の皆さんは探究活動にそれほど時間をかけられない、という事情もあり、フィールドワーク等で得た知見を自身でまとめる、ということに終始する傾向があります。したがって探究の深さが不足しているという点は改善すべき部分であると思います。この点については、昨年度から 2 年次の個人研究も可としたことにより、生徒の皆さんの探究の深さは格段に向上したと思っています。

来年度は文部科学省指定事業がなくなることから経済的支援もなくなるというデメリットが確かにあります。しかし、課題探究の方向性が、NGP の研究目的に関わる「SDGs」・「地域課題」・「グローバル」等に縛られることなく設定できるというメリットも指摘できます。このようなメリットを最大限利用しつつ、次のステップ、つまり SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）指定校となり、「探究」のさらなる深化を図る予定です。図らずも新型コロナウイルス感染症の拡大によって、「グローバル」「国際交流」の側面での充実が若干難しい時代ですので、「探究」に力を注ぐことによって生徒の皆さんの学問的興味関心をさらに喚起し、そのことが進路意識や進路実績の向上に寄与することを期待したいと考えています。

最後になりましたが、長野高校の 8 年間にわたる SGH・NGP 事業の活動に対して、お世話になったすべての皆さんに対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

目次

緒言

第1章 研究開発完了報告

研究開発完了報告書	1
目標設定シート	10
成果概要図	11
予算書	12
事業推進の組織	13

第2章 事業報告（仮説と実践）

長野高校グローバルファシリテーター育成プログラム	16
Ⅰ 仮説1に係る実践 総合的な探究の時間	17
取組の概要 / 「長野のグローバル戦略を探る」 / 「SDGs から見た長野のグローバル戦略」 / 「グローバルアカデミア」	
Ⅱ 仮説2に係る実践 学校設定科目及びグローバルな学び	35
取組の概要 / 英語キャリアプロジェクトⅠ / 英語キャリアプロジェクトⅡ / リーダー研修プログラム (GLOBAL STUDY in Beppu) / グローバルな学びへの参加	
Ⅲ 仮説3に係る実践 コンソーシアム等との連携事業	48
コンソーシアム構成機関との協働/コンソーシアム連携で行われた事業	

第3章 成果と評価、課題

Ⅰ 実績の成果と評価	51
1 校内における成果の検証および評価の方法について	51
2 成果と評価	51
Ⅱ 運営指導委員会による評価	56

参考資料 事業アンケート結果

あとがき

第1章

グローバル事業 研究開発完了報告

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 長野県長野市大字幅下 692-2
管理機関名 長野県教育委員会
代表者名 教育長 原山 隆一

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日 ～ 令和4年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 長野県長野高等学校
学校長名 宮本 隆
類型 グローカル型

3 研究開発名

SDGs 未来都市を創造するグローバルファシリテーターの育成

4 研究開発概要

「レイヤー的思考」「ブレイクスルー発想」「国際的な対話力」を育成する探究を学校設定教科「NGP」、学校設定科目「英語キャリアプロジェクト」及び総合的な探究の時間で行う。国際会議を開催し地方創生に繋がる政策を提言し、コンソーシアムとの協働により発信する。学校だけでは完結しない、新しい学びの体系を研究開発する。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 有
- ・教育課程の特例の活用 有

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
中村 正行	信州大学工学部教授	委員長
山口 利幸	元長野県教育長	副委員長
久世 良三	株式会社サンクゼール代表取締役会長	

清水 唯一朗	慶応義塾大学総合政策学部教授	
中川 美紀	ソフトインテリジェンス塾代表・ビジネスアナリスト	

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
長野市	荻原 健司
長野県企画振興部総合政策課	金井 伸樹
長野県教育委員会	原山 隆一
信州大学教育学部	宮崎 樹夫
信州大学工学部	天野 良彦
長野県立大学	金田一 真澄
東京海上日動火災保険株式会社長野支店	橋本 有司
長野青年会議所	百瀬 衛
八十二銀行	松下 正樹
金鷲会（同窓会）	桃林 聖一

8 カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	—	—	—
海外交流アドバイザー	恵崎 良太郎	松本空港国際化特別顧問	月1回程度来校（報償なし）
地域協働学習支援員	田中 伸篤	東京海上日動火災保険株式会社長野支店 広域・グローバル支援担当	随時支援（報償なし）
	中村 真紀子	元長野放送報道部及び広報部	非常勤職員として県が雇用

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(ア) 運営指導委員会の設置及び開催	←				↔						↔	→
(イ) SH フォーラム											↔	
(ウ) 「探究的な学び」研究会				↔								
(エ) 指定校取組の紹介	←											→
(オ) 人事面における配慮	←											→

(2) 実績の説明

① 管理機関による管理方法

県教育委員会所管課（学びの改革支援課）に担当指導主事を置き、指定校の取組に係る手続等を一括管理。同課内に置く他の文部科学省事業指定校を担当する指導主事との間で情報共有及び

連携を日常的に行うとともに、指定校事業担当者に対して、事業全般に係る恒常的な指導・助言を行った。

② コンソーシアムの体制強化と地域連携の推進

コンソーシアム構成団体を9団体から10団体にするとともに、コンソーシアム構成団体間の連携・協働体制の強化を図った。

③ 管理機関による主体的な取組

(ア) 運営指導委員会の設置及び開催

- ・研究開発関連授業の参観、取組の概要説明、意見交換及び指導
8月26日(木) オンライン会議、2月3日(木) オンライン会議

(イ) 指定校取組の紹介

- ・指定校の研究開発成果、運営指導委員会の内容について広報し、本事業について周知を図る。

(ウ) 人事面における配慮

- ・県の「カリキュラム編成支援事業」により、地域協働学習実施支援員を配置
- ・外国語指導助手 (ALT) 1名に加え、実績のある特に優秀な外国人講師をグローバル講師として県独自に雇用し、そのうち1名を長野高校に配置

④ 事業終了後の自走を見据えた取組について

(ア) 地域協働学習実施支援員の配置の継続等、コンソーシアムの継続に係る予算措置

- ・事業終了後も海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員及びグローバル講師を配置する等、本事業の骨格を維持するため予算措置を行う予定

(イ) 発信力育成講座の発展・継続

- ・プレゼンテーション及びディスカッションに係る大会を実施し、県内高校生の発信力育成の充実を図る。

(ウ) 「探究的な学び」研究会

- ・県立高等学校の学習指導担当者が集まり、指定校の研究開発の軌跡について学び、各校における「探究的な学び」の充実に資する研修会を開催

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目 ※①②総合的な探究の時間③総合的な学習の時間	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 「長野のグローバル戦略を探る」	←											→
② 「SDGs から見た長野のグローバル戦略」	←											→
③ 「グローバルアカデミア」	←											→
④ 課題探究中間発表会 (1年)											↔	
⑤ 課題研究発表会 (2年)									↔			
⑥ グローバルアカデミア発表会・国際会議		↔		↔								
⑦ 「英語キャリアプロジェクトⅠ」	←											→
⑧ 「英語キャリアプロジェクトⅡ」	←											→
⑨ 台湾との協働プロジェクト (オンライン)							←	→				

⑩ 台湾研修のための連携会議（オンライン）						↔			↔			
⑪ 米国リーダー研修（中止）												
⑫ グローバル人材育成プログラム（⑩の代替）	←											→
⑬ 上記以外の校外との連携プログラム	←											→
⑭ 成果の普及	←											→
⑮ グローカル事業研究報告書												↔
⑯ グローカル事業評価委員会											↔	

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

- ・学校だけでは完結しない、全生徒対象の新しい学びの体系を研究開発している。「レイヤー的思考」「ブレイクスルー発想」「国際的な対話力」の3つのスキルを育成するために、学校設定教科・科目、校外フィールドワーク、外部人材活用、遠隔授業、海外研修、教科横断的な学びを日常の授業の中に位置づけている。
- ・地域課題研究に係る全体テーマ「コンソーシアム・連携組織との協働による、長野県が抱える地域課題の解決と、『SDGs 未来都市』計画の実現に向けた効果的な戦略の研究」を踏まえ、長野県が抱える課題解決に資するテーマを設定し、課題研究を行っている。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

（各教科・科目や総合的な探究／学習の時間、学校設定教科・科目等）

- ・学校設定教科「NGP」(NAGANO GLOBAL PROJECT)を設定し、学校設定科目「英語キャリアプロジェクトⅠ、Ⅱ」及び「総合的な探究の時間」で、1・2年生全員が課題探究を行うと共に、新しい学びを実現するカリキュラムを開発し実践している。
- ・3年次は、「総合的な学習の時間」（「グローバルアカデミア」）選択生を中心に国際会議を開催し、国内外の関係者と生徒が広く議論を交わし、地方創生につながる政策提言を行った。さらに、その提言をコンソーシアムとともに広く発信し、3年間における学びの集大成とした。

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

(ア) 課題研究「長野のグローバル戦略を探る」（総合的な探究の時間 1学年全員 1単位）

- ・フィールドワークⅠ 11/29(月)
- ・課題研究中間発表会 2/7(月)・9(水) → 中止
- ・課題研究論文作成 2/10(木)～3月

(イ) 課題研究「SDGs から見た長野のグローバル戦略」

（総合的な探究の時間 2学年全員 1単位）

- ・フィールドワークⅡ 7/19(月)
- ・テーマ探究及び発表会準備 9月～12月
- ・プロジェクト発表会及び課題研究発表会 12/15(水)
- ・研究論文作成 1月～2月

(ウ) 課題研究「グローバルアカデミア」（総合的な学習の時間 3学年選択者19名 1単位）

- ・事前学習会（オンライン Google Meet を使用） 5/10(月)
信州地域デザインセンター倉根明徳氏による「国際交流に関する基礎知識」「街づくりとは何か」についての講演とグループ演習
- ・SDGs 地方創生会議 国際会議「グローバルアカデミアオンライン2021」 5/22(土)
オンラインのメリットを生かし、生徒自らが国内外から参加者を集めて実施。持続可能な街づくりをテーマに議論を行い、英語で発信。ゲストから高い評価をいただいた。ゲスト David Bromell 氏 (NZ, Victoria University of Wellington 教授)
- ・まとめとしてポスター・英語エッセイを作成 6月～9月

(エ) 「英語キャリアプロジェクトⅠ」 NGP 学校設定科目* 1学年全員 1単位

- ・「グローバル教育推進室長」は、海外交流アドバイザー・地域協働学習実施支援員と協力し、コンソーシアムとの連絡・外部講師の招聘・予算の適切な執行等に努め、事業を円滑に推進する。そのため、授業持ち時間を考慮する。
- ⑥ カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の校内における役割・位置付け
- (ア) 海外交流アドバイザー
- 恵崎良太郎（松本空港国際化特別顧問）
 - ・SDGs 国際会議 in Taiwan のコーディネーター（学校交流，海外インタビュー）
 - ・長野県が交流協定を結んでいる各国からの留学生受入
- (イ) 地域協働学習実施支援員
- 田中 伸篤（東京海上日動火災保険株式会社）
 - ・地域課題設定アドバイザー，広域フィールドワークコーディネーター
 - 中村真紀子（元長野放送報道部及び広報部）
 - ・フィールドワークにおける校内外の情報集約及び調整
 - ・外部講師の招聘，調整，学校のHPによる地域・社会への発信
- ⑦ 学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，計画・研究方法・成果を定期的に評価し，改善していく仕組みについて
- ・「事業研究委員会」（グローバル教育推進室及び学年課題担当者会・各班担当者会からなる）は，「事業評価委員会」より定期的に評価・助言を受ける。
 - ・管理機関との連絡を密にし，恒常的に指導・助言及び必要な支援を受ける。
 - ・管理機関が設ける運営指導委員会を年2回開催し，研究開発の進捗状況全体について専門的な見地から指導・助言を受け，必要な改善点を明確化する。
 - ・年2回開催する運営指導委員会の事業全体に対する指摘を踏まえ，年2回実施する事業評価委員会及び年3回実施するコンソーシアム担当者会議において，個別の企画について検討を行い，具体的な修正・改善を加える。
- ⑧ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について
- ・生徒自らが，的確な課題を設定し，その解決につながる実効性ある政策を提言する力を身に付け，将来「長野県 SDGs 未来都市計画」を実現して魅力ある長野を創造する人材となるよう，共通認識のもとで学びの場を提供するとともに，計画的・継続的な助言・支援を行う。
- ⑨ 運営指導委員会等，取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について
- ・8/26(木)，2/3(木)の2回，運営指導委員会を開催。委員5名による指導・助言
 - ・7/9(金)，2/3(木)の2回，コンソーシアム担当者会議を開催。担当者による情報交換，助言
- ⑩ 類型毎の趣旨に応じた取組について
- (ア) グローバルなスケールでキャリアデザインを始める科目「英語キャリアプロジェクトⅠ」
- ・「英語プロジェクト発表会」では，自分の好きなテーマについて説明することで，英語で積極的に発信する態度と運用能力の育成を図った。
 - ・総合的な探究の時間「長野のグローバル戦略を探る」と連携し，グループでのブレインストーミング，ディスカッション講座等を実施。英語で思考・議論する国際的対話力の育成を図った。
 - ・パラメンタリー・ディベートを通じて，自分の立場を踏まえ，的確に主張するトレーニングを行った。

(イ) 海外プロジェクトを通して、グローバルファシリテーター育成を目指す科目「英語キャリアプロジェクトⅡ」

- ・2学年全員が台湾の高校生との協働によるグループプロジェクト、ビデオ協働制作プロジェクト「Video Exchange」に参加。Google Meet を使った話し合いでテーマを決め、Google ドライブなどのクラウドを活用してビデオを作成。優秀な作品を表彰した。国際プロジェクトを通して相互理解を深め、自らの役割を認識する契機となった。
- ・11月25日(木)に2年生全員が研修旅行で立命館アジア太平洋大学 (APU)を訪れ、大学生(国際学生)との交流を実施。台湾との学校交流の際に制作したビデオの紹介等を行った。生徒にとっては、対面での貴重な交流となった。また、コロナ禍でオープンキャンパスの参加が難しい中、模擬講義やキャンパスツアーなど大学生活の体験を通して、生徒の卒業後の進路を考える機会にもなった。
- ・グローバル講師やALTとのTTによる授業では、プロジェクト型体験学習を通して、英語での議論の仕方、ファシリテーターとしての役割、ICT活用技術等を学んだ。様々な意見を踏まえ、英語で建設的に自分の意見を発信する力及び円滑に議論を進める態度の育成を図った。
- ・「総合的な探究の時間(SDGsから見た長野のグローバル戦略)」の授業と連携し、SDGsと地域課題の解決を目指すテーマについて、ディベートを行った。その結果、英語4技能に加えて、課題発見能力などを養うことができた。

(ウ) グローバルな経験を有する各界の専門家ゲストとして招聘し、グローバル・ローカルな視点から地域創生に資する提言を行う国際会議「グローバルアカデミア」の実施

- ・立命館アジア太平洋大学 (APU)、東京大学、東京外国語大学、早稲田大学の学生、高校生(長野日大高校)、アメリカ、オーストラリアの高校生、アメリカで活躍する社会人が参加。4つの分科会に分かれてディスカッションを行い、提言を英語でまとめ発表した。会議の様子はYouTube Liveで発信。

(エ) リーダー研修と海外交流を通じて生徒を育てる「グローバル人材育成プロジェクト」

- ・3月14日(月)、15日(火)に1年生25名が立命館アジア太平洋大学 (APU)を訪れ、大学生(国際学生)との交流を実施予定であったが、感染拡大の影響で現地訪問による交流は中止になった。代替として3月15日(火)にオンラインによる本校生徒5~6人と大学生でグループを作り、お互いに自己紹介、出身地などについて交流した。

⑪成果の普及方法・実績について

(ア) 発表会の公開：「グローバルアカデミアオンライン2021」(オンライン限定公開)

(イ) 職員研修会

- ・校内教務係・ICT係・NGP事業推進室共催 ロイロノート研修会

(ウ) 実践報告

- ・令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット 1月20日(木)
- ・進路指導・キャリア教育専門誌「キャリアガイダンス439号」掲載
- ・学校訪問受け入れ(沼津市立沼津高等学校、栃木県立宇都宮南高等学校)

(エ) HP, SNSの更新：NGPブログによる情報発信、インスタグラムの活用

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 進捗状況 以下の仮説に基づき、目標達成へ向けて概ね順調に推移している。

- 仮説1** 高校生が地域創生に向けた効果的な協働を通じて主体的に活動することで、長野県が「SDGs 未来都市・学びの県」にふさわしいグローバル人材育成の場となる。
- 仮説2** PBL 型の英語教育と教科横断型の学びを通じて、グローバル視点のキャリア観を段階的に育成することで、グローバルファシリテーターとしての資質が養われる。
- 仮説3** コンソーシアムと協働し、レイヤー的思考、ブレイクスルー発想、国際的な対話力を養成するカリキュラムを開発することで、生徒の探究的な学びの質が高まり、実効性の高い政策提言を可能にする。

- ・「SDGs 地方創生国際会議」のオンライン開催による「グローバルアカデミア」の開発（3学年「総合的な学習の時間」）
- ・コロナ禍における制約はあったが、オンライン又は感染対策を取りながら以下のプログラムを継続的に実施
 - 「ディスカッション講座」「インタビュー実践」「フィールドワークⅠ」（以上1学年「総合的な探究の時間」）
 - 「英語プロジェクト発表会」（1学年「英語キャリアプロジェクトⅠ」）
 - 「フィールドワーク相談会」「フィールドワークⅡ」「プロジェクト発表会・課題研究発表会」（以上2学年「総合的な探究の時間」）
- ・課題研究の課題設定においてコンソーシアムから生徒にアドバイスをもらう仕組みを今年度も継続（以上2学年「総合的な探究の時間」）
- ・まん延防止等重点措置で分散登校（半分の生徒が登校、半分の生徒は自宅でオンライン学習）になったが、グローバルインストラクターと対面授業の教室、自宅の生徒をオンラインで結びオンラインディベートを開発（2学年「英語キャリアプロジェクトⅡ」）
- ・コロナ禍で当初の研究実施計画の一部変更をせざるを得なかったが、構想調書に記載した設定目標の実現へ向け、研究を推進している。

(2) 成果及び評価

- 今年度外部との協働により開発・改善した主なプログラム
- 1年 インタビュー実践
- 2年 フィールドワークⅡ、課題研究に関する助言、ビデオ協働制作プロジェクト「Video Exchange」、プロジェクト発表会・課題研究発表会
- 3年 SDGs 地方創生国際会議による「グローバルアカデミア」

(ア) SDGs 未来都市、学びの県にふさわしいグローバル人材育成について 【前年度報告書 課題1に関連して】

- ・生徒が主体的に地域とつながりながら研究・活動をするようになった。
- ・1人1台タブレット端末が導入された。タブレットを用いて教員と生徒、生徒同士の双方向のやりとりが可能になり、従来の授業の形式とは大きく変化した。昨年度確立したオンラインシステムも1・2年生に1人1台端末が導入されたことで、授業やオンラインを活用し学びがさらに進化した。生徒・保護者から高い評価を得た。

(イ) グローバルな視点でのキャリア観の育成【前年度報告書 課題2に関連して】

- ・「グローバルファシリテーター」のロールモデルを校内外に提示

- ・海外とのつながりを生かして、地方創生を目指す国際会議の充実（「グローバルアカデミア」）
- ・2学年ビデオ協働制作プロジェクトでは、生徒がそれぞれの資質・能力や興味・関心を生かしながら世界とつながり国際貢献に資する体験をすることができた。
- ・台湾の高校生とのビデオ協働制作プロジェクト「Video Exchange」は、現地の生徒や教育現場からも高く評価された。

(ウ) カリキュラム開発，実効性の高い政策提言について【前年度報告書 課題3に関連して】

- ・昨年度から，1年生はグループでの課題研究，2年生は個別の課題研究を行う体制に変更し，学びの個別最適化を図った。その結果，今年度は2年生の課題研究はより個別研究化が進んだが教職員やコンソーシアムからの指導・助言を生かしながら，より多くの生徒が意欲的に課題研究に取り組めるようになった。
- ・昨年度よりプロジェクト発表会での発表形式を自由にした。今年度は1人1台タブレット端末の導入により，さらに創意工夫のある発表が行われ，内容も充実させることができた。

1.2 次年度以降の課題及び改善点

・今年度で国の指定事業は終了するが，SGHの時代から8年で培った新しい学びは今後も維持し，発展させる。校外（コンソーシアム，学びのネットワーク）の連携は継続する。今後の課題は以下の通りである。

(1) 課題研究のさらなる充実

・課題研究の課題設定をSDGs関連だけでなく，進路希望に関連させた課題設定も推奨し，生徒の探究活動への意欲のさらなる向上を図る。また，生徒の政策提言だけでなく，生徒が課題解決のため一歩踏み出す活動を支援する。また，個別研究化に伴い，職員の指導体制の構築を進める必要がある。

(2) 国際交流の継続

・コロナ禍で対面での海外における交流の実施は不透明であるが，オンライン交流や国内での代替で交流は継続する。

(3) その他

① 地域への，成果の還元

② 個別最適な学びのさらなる充実

・1人1台タブレット端末の効果的な活用方法の研究

③ 生徒間の学びの交流の促進

・新しいカリキュラムの開発は教員主導で行われがちである。研究テーマごとに学年を超えて生徒が集まり研究するなど，生徒間での学びの促進を目指していく。

【担当者】

担当課	長野県教育委員会学びの改革支援課	TEL	026-235-7435
氏名	帯川 有美	FAX	026-2357495
職名	指導主事	e-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

ふりがな	ながのけんながのこうがっこう	指定期間	2019～ 2021
学校名	長野県長野高等学校		

2021年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2022年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
国際会議等へ参加し、ファシリテーターとしての役割を果たした生徒数						単位：人
a	本事業対象生徒：		89人	108人	114人	120人
	本事業対象生徒以外：		0人	0人	0人	0人
目標設定の考え方：グローバルファシリテーター育成の活動により、意識の向上が図られる。						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
将来長野市内企業等へのインターンシップを希望する生徒数						単位：人
b	本事業対象生徒：		182人	209人	166人	180人
	本事業対象生徒以外：		0人	0人	0人	0人
目標設定の考え方：地域との協働事業によって地方創生への関心・意欲が高まると考えられる。						
(その他本構想における取組の達成目標)						
3年次英語外部検定試験で、CEFR B1レベル相当以上を取得している生徒数						単位：人
c	本事業対象生徒：			271人	266人	270人
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：外部検定試験に係る入試制度変更に伴い、3年次にCEFR B1レベルに相当する力がある生徒数を算出。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2022年度)
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
海外留学及び海外ボランティア等へ自主的に参加した生徒数						単位：人
a			6人	1人	0人	2人
目標設定の考え方：トビタテ留学ジャパン等、短期・長期の海外留学及び海外ボランティア参加生徒数。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
AFS等海外留学生の受け入れ数						単位：人
b			1人	0人	0人	2人
目標設定の考え方：長野高校において海外留学生を受け入れた人数						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
協働してプロジェクトに取り組める知人が海外にいる生徒数(新規)						単位：人
c				313名	319名	320人
目標設定の考え方：海外との協働を経験した生徒の数						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2022年度)
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
3年生のうち、将来長野県への地域貢献をしたいと希望する生徒数						単位：人
a			63人	69人	71人	80人
目標設定の考え方：JC(長野青年会議所)・長野市役所・長野県が企画する事業・活動への参加生徒数						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
教員・保護者以外で、地域に相談できる大人がいる生徒数(新規)						単位：人
d				211人	271人	250人
目標設定の考え方：生徒が、長野での進学、就職の際に相談できると感じる大人の数。地域の学びの土壌として評価						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数(人)	840	840	840	840	840
本事業対象生徒数			840	840	840
本事業対象外生徒数			0	0	0

長野県教育委員会【長野県長野高等学校】 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究開発構想名 SDGs未来都市を創造するグローバルアシリエーターの育成

研究開発プロジェクト名 NAGANO GLOBAL PROJECT 長野グローバルプロジェクト（NGP事業）

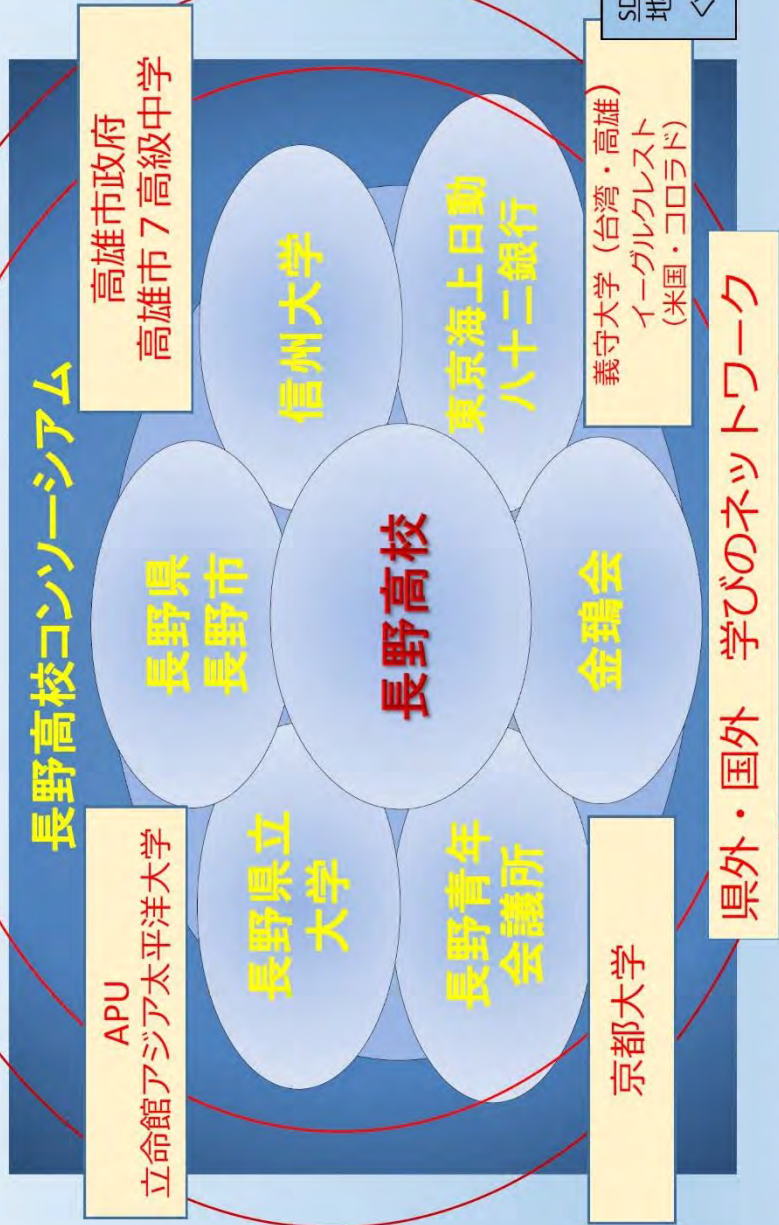


研究開発の背景・実施体制

地域との協働による学校で完結しない学びの実現を目指した

校内（推進室）と校外（コンソーシアム・学びのネットワーク）の連携

- 令和元年度目標
地域での連携・協力・共有・伴走／海外交流の充実／学びの深化・拡大
- 令和3年度の主な取組状況・成果
 - 1 地域での学びの推進
課題探究学習 近隣高校との連携
フィールドワーク WWLとの連携
 - 2 世界との学びの推進
台湾とのビデオ協働制作
留学生インタビュー
GLOBAL STUDY in Beppu
 - 3 主体的なプロジェクトの推進
外部発表（グローバル探究発表会他）
NPOで高校生の活動をリード



事業終了後の課題 地域への成果の還元、個別最適な学びのさらなる充実、生徒間での学びの交流促進

管理機関名	長野県教育委員会
学校名	長野県長野高等学校

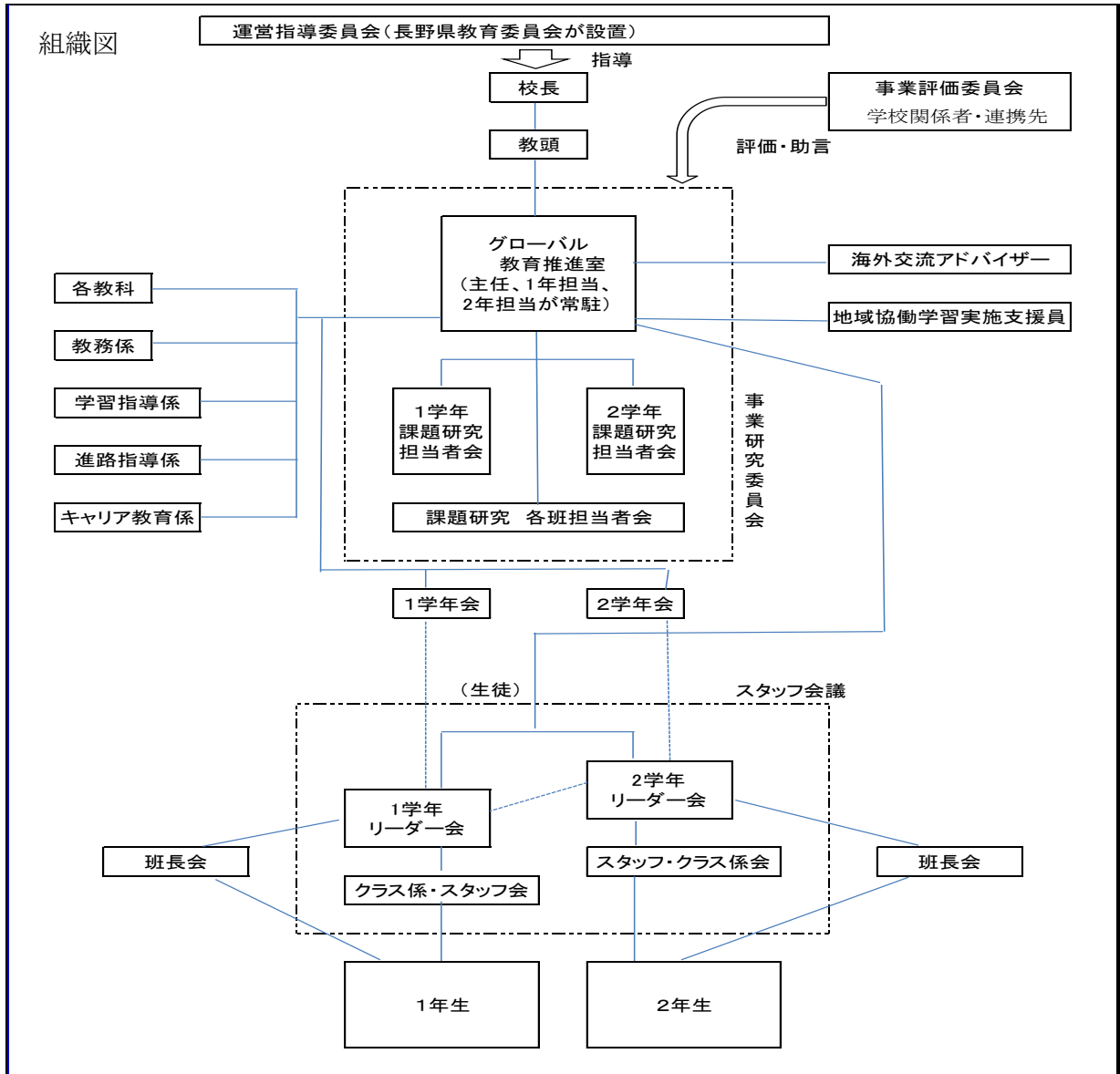
令和3年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 決算内訳書

経費区分	事業規模 ①+②	委託費 決算額 ①	管理機関 負担額※1 ②	摘要	積算内訳	備考
1. 諸謝金	204,449	204,449	0	第1回運営指導委員会謝金	4 人 × 1.5 時間 × 6,400 円 = 38,400 円	⑤教授級(6,400円)
				第2回運営指導委員会謝金	4 人 × 1.5 時間 × 6,400 円 = 38,400 円	⑤教授級(6,400円)
				外部講師謝金	1 人 × × = 9,600 円	①,②,③,④
				九州連携研修(リモート)講師謝金	人 × × = 118,049 円	①,②,③
2. 旅費	1,572,595	1,572,595	0	九州研修教員旅費	1 人 × 1 回 × 15,600 円 = 15,600 円	②
				九州研修生徒旅費	274 人 × 1 回 × 4,500 円 = 1,233,000 円	②
				九州連携研修キャンセル代	25 人 × 0.2 × 64,799 円 = 323,995 円	②
3. 借損料	0	0	0			
4. 会議費	0	0	0			
5. 通信運搬費	32,424	32,424	0	連絡等郵便切手代	386 枚 × 84 円 = 32,424 円	①~⑥
6. 消耗品費	191,500	191,500	0	印刷機インク・マスター	個 × 円 = 129,800 円	①~⑥
				印刷用紙	個 × 円 = 36,125 円	①~⑥
				インクカートリッジ	個 × 円 = 25,575 円	①~⑥
7. 雑役務費	392,816	392,816	0	国際会議報告書(紙媒体)	80 部 × 1,210 円 = 96,800 円	④
				NGP論文集(紙媒体)	100 部 × 990 円 = 99,000 円	④
				NGP研究報告書(紙媒体)	100 部 × 990 円 = 99,000 円	④
				NGP研究収録(電子媒体)	1 式 × 98,016 円 = 98,016 円	④
8. 人件費	579,861	482,073	97,788	事務補助員雇用保険料等	日 × 月 × 円 = 16,073 円	①~⑥
				事務補助員賃金	100 日 × 月 × 4,660 円 = 466,000 円	①~⑥
				事務補助員賃金	97,788 円	管理機関負担
11. 消費税相当額	0	0	0		× 円 = 0 円	
小計	2,973,645	2,875,857	97,788			
再委託費計※2		0				
合計	2,973,645	2,875,857	97,788			

<取組項目(経費使途)>

- | | |
|--------------------|------------------|
| ①課題研究「長野のグローバル戦略」 | ④研究成果の発表・国際会議の開催 |
| ②海外等研修 | ⑤運営委員会・代表者会議の開催 |
| ③グローバル・ファシリテーターの育成 | ⑥合同連絡協議会情報交換 |

グローバル事業の組織



第2章

事業報告（仮説と実践）

長野高校グローバルファシリテーター育成プログラム(2021)

		2年												3年		
		個別研究												グローバルアカデミア		
		SDGs(グローバル)課題探究												グローバルアカデミア		
		地域課題探究												グローバルアカデミア		
		(転換点)												グローバルアカデミア		
		グローバルワーク												グローバルアカデミア		
		基礎												グローバルアカデミア		
		グローバルファシリテーターの視野①												グローバルアカデミア		
		ローカルからグローバルへの視点移行												グローバルアカデミア		
		グローバルファシリテーターとしてのキャリア開発												グローバルアカデミア		
位置づけ	基礎	ローカルからグローバルへの視点移行 高校生活にも慣れ、自分の生き方や進路を考え始める生徒に、自分の興味や適性をもつめるとともにグローバルな視野を持って地域と関わり、地方創生のために自分たちの世代は何か必要かを考え、その能力開発のために主体的かつ探学的に学ぼうとする意欲を喚起する。												グローバルファシリテーターとしてのキャリア開発 グローバル・ローカル・自己をレイヤー的に置いて見えてきた地域課題及びその解決に至るプロセスの中に、自己を落とし込む。SDGs実現のゴールとなる2030年までの自らの人生を風通して、地方創生に関わる自分なりの進路を考え、最適な学びの企画・実行能力を育てる。		
	発展	ローカルからグローバルへの視点移行 1年次後半から、連続的に「国際的な対話力」「レイヤー的思考」「フレキシブルな発想」を学ぶ。多様な価値観を持つ人々との協働の中で常に最適解を求め続け、その解を自らの発達段階に意図的に落とし込む探究プロセス設計力を養う。この過程でグローバルとローカルの概念を融合する。												グローバルファシリテーターとしてのキャリア開発 グローバル・ローカル・自己をレイヤー的に置いて見えてきた地域課題及びその解決に至るプロセスの中に、自己を落とし込む。SDGs実現のゴールとなる2030年までの自らの人生を風通して、地方創生に関わる自分なりの進路を考え、最適な学びの企画・実行能力を育てる。		
課題研究	総合	基礎スキル養成	テーマ設定①	FW(フィールドワーク) I	中間発表 論文作成	自己研究	課題設定とリサーチ	FW II FW報告会	研究・プロジェクト化	プロジェクト発表会	振り返り	国際会議	まとめ 進路研究			
	教科全体	教科連携・SDGsへのアプローチ												*1 2021年度はオンラインで対応 *2 別府市にて代替研修		
内容	ガイダンス	プレスト ディスカッション インタビュ	事前学習① 仮説設定へ	事前学習② FWへ	PPT 発表原稿作成 発表練習 発表会	自己評価	SDGs学習 ワークショップ 情報収集	FWまとめ 発表・対話	研究の深化 発表企画 発表原稿作成発表練習	台湾交流の ふり返り プロジェクト 発表会	自己 評価 ・論文					
	英語 キャリア プロジェクト	プレゼンテーション①	プレゼンテーション②	英プロ 発表会	ディベート①		台湾との交流 台湾への向けたトレーニング スピーキング・ディスカッション			振り返り ディベート②						
地域と協働 した学び	ガイダンス・事業 紹介	ガイダンス・事業 紹介	インタビュー実践	校外との連携(希望者)	2年プロジェクト 発表会 (参加) 1年中間発表 (発表)	FWへの 助言	ガイダンス FWへの助言	校外との連携(希望者) 課題研究についての助言(全員)	プロジェクト 発表会	外部発表						
	国際会議 グローバルアカデミア 留学プログラム説明会	国際会議 グローバルアカデミア 留学プログラム説明会	国際会議 グローバルアカデミア 留学プログラム説明会	校内外の留学生との交流(通年)	米 国 リ ー ダ ー 研 修 *2	報告会	国際会議 グローバルアカデミア 留学プログラム説明会	台湾学生とICT交流 九州研修旅行 (APU国際学生と交流)	外部発表							
リーダー研修				リーダーズプログラム												
進路指導	講演会・グローバル キャリア	講演会・グローバル キャリア		文理 選択												

I 仮説 1 に係る実践

高校生が地域創生に向けた効果的な協働を通じて主体的に活動することで、長野県が「SDGs 未来都市・学びの県」にふさわしいグローバル人材育成の場となる。

I 総合的な探究の時間「長野のグローバル戦略を探る」

- i 学年・単位数 1 学年・1 単位
- ii 目標
 - ①探究活動に必要なスキルや多角的な視点を身につけさせる。
 - ②課題研究を課すことで、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を図る。
 - ③2 年次につながる課題発見・仮説の構築を行う。
- iii 年間計画（1 授業時間 55 分）
 - 4 月～7 月(10 時間)：オリエンテーション・ブレインストーミングワークショップ・ディスカッション講座・インタビュー実践
 - 8 月～12 月(13 時間)：課題研究開始・リサーチ・フィールドワーク
 - 1 月～3 月(9 時間)：発表準備・リハーサル・課題研究発表会・e ポートフォリオ化
- iv 評価方法
授業での意欲・関心・協働して学ぶ態度を評価する。
課題研究発表会をルーブリックで評価する。
成果物・レポートを評価する。
- v 授業方法
生徒の一人一台タブレットを用いて行う。授業はチームティーチングを中心に行う。
校外でのフィールドワーク、外部講師によるワークショップ、発表会を含む。

II 総合的な探究の時間「SDGs から見た長野のグローバル戦略」

- i 学年・単位数 2 学年・1 単位
- ii 目標
 - ①SDGs を学び地域課題を見つめ直し、世界の変化と身の回りの変化を敏感に感じながら、レイヤー的思考から課題設定をする力を養う。（課題設定能力）
 - ②探究学習の基礎スキルを運用して、地域や海外の多様な人々と対話をし、協働的に地域課題解決法を探る。（多様化したチームでの協働）
 - ③フィールドワーク等のタスクを実践し、その成果も踏まえて地域課題のブレイクスルーとなるような解決策を提言する。（課題解決能力）
- iii 年間計画（1 授業時間 55 分）
 - 4 月～7 月(22 時間)：SDGs オリエンテーション(JICA)・SDGs 課題設定・探究プロセス設計ワークショップ(東京海上日動火災保険株式会社他)・データ活用ワークショップ(東京海上日動火災保険株式会社)・フィールドワーク相談会(東京海上日動火災保険株式会社・長野市・長野県立大学他)・フィールドワーク(長野県内及び首都圏)
 - 8 月～12 月(14 時間)：SDGs グローバルワークショップ開催(長野県立大学・JC 長野青年会議所)・発表準備・課題研究発表会・SDGs 国際会議 in Taiwan(台湾研修旅行)・海外インタビュー(台湾研修旅行)
 - 1 月～3 月(5 時間)：論文・e ポートフォリオ作成
- iv 評価方法
授業での意欲・関心・協働して学ぶ態度を評価する。
課題研究発表会をルーブリックで評価する。

成果物・レポートを評価する。

v 授業方法

生徒の一人一台タブレットを用いて行う。授業はチームティーチングを中心に行う。
校外でのフィールドワーク、外部講師によるワークショップ、発表会を含む。

Ⅲ 総合的な探究の時間「グローバルアカデミア」

i 学年・単位数 3学年・1単位

ii 目標

- ①「地方創生国際会議 in NAGANO」を企画運営する。
- ②SDGs 未来都市へ向けた提言をコンソーシアムと共に発信する。
- ③研究の成果を英語論文にまとめる。
- ④探究学習の成果を踏まえて進路研究を行う。

iii 年間計画（1授業時間 55分）

4月～7月(16時間)：提言作り・校内発表・国際会議での提言発表

8月～12月(14時間)：英語論文集作成(希望者)・進路研究

1月～3月(2時間)：進路研究

iv 評価方法

授業での意欲・関心・協働して学ぶ態度を評価する。

課題研究発表会をルーブリックで評価する。

成果物・レポートを評価する。

v 授業方法

PC等、ICT環境が整った教室でのチームティーチング、プロジェクト型授業
国際会議運営・発表及び事前・事後指導等を予定。

1 「長野のグローバル戦略を探る」（総合的な探究の時間）

授業内容

① オリエンテーション「ブレインストーミング」他 4月9日（金）

- ・目的：課題研究の基礎スキルとして、ディスカッション能力を高め、今後の課題研究や教科学習のグループワーク等において協働的で有意義な話し合いができることを目指す。
- ・内容：「高校生活で身につけたい力」をテーマにブレインストーミングを行い、自分の意見をどれだけ出せるか、沢山の意見からグループとしての考えをどうまとめていくか、一連の流れを体験した。

② ディスカッション講座 7月13日（火）・14日（水）

- ・目的：課題研究の基礎スキルとして、ディスカッション能力を高め、今後の課題研究や教科学習のグループワーク等において協働的で有意義な話し合いができることを目指す。
- ・内容：ワークショップ形式で実施。「議論」の方法論を学ぶ。
- ・成果：ディスカッション方法論の共有や参加者の役割、姿勢について、身近な例を挙げながら説明し、実践した。生徒にとって、議論の仕方への理解が深まると共に、議論に参加しながら自らを対象化するという体験の場になった。

③ インタビュー実践Ⅰ 講師へのインタビュー 9月7日（火）8日（水）

- ・目的：9月以降の班別課題研究へ向けて自分の興味・関心の深化と拡大を図る。また2次情報のリサーチやグループ討論を元に準備した問いを、様々な分野で活躍している外部講師に投げかけ、1次情報集約の練習をする。
- ・内容：講師による30分程度のレクチャーの後、各クラスが40分の持ち時間で準備した質問に基づきインタビューを行う。

◎講師一覧

山田 康弘 氏 (NHK 長野放送局 アナウンサー)
清水 唯一朗 氏 (慶應義塾大学 総合政策学部教授)
中田 北斗 氏 (北海道大学大学院獣医学研究員)



- ・成果：9月以降の班別課題研究へ向けて自分の興味・関心の深化と拡大を図る機会となった。生徒にとっては外部講師の話を知る最初の機会であり、社会経験を多く積んだ大人との対話の中で、「インタビューにおける質問の質」、「インタビューする側の視点でなく、インタビューする相手の視点や第三者の視点を持つことの大切さ」など情報の集約についての理解が深まった。時間の関係で質問を準備する時間が確保できなかったが、11月のFWを想定し、講師の先生の話を知る中で質問を臨機応変に考える力を養う実践演習を行うことができ有意義な機会であった。

・生徒の感想より

☆私は最近、人にわかりやすく出来事や自分の考えを伝えるためにはどうすれば良いのかということについて考えていた。先生の話はスラスラと入ってきた。それはどうしてかと考えてみると、話の通り自信を持つことや時間の流れを考えることを先生自身が実践しているからだと思った。また、私たちに興味を持たせるような話し方や、相手を受け入れるような言葉が多く、自分の話だけをすすめるのではなく、相手との対話を作り上げていくことが大切だと思った。

☆周りからの刺激が自分を成長させるというのは何事も前向きに捉えていないと自分を変えるという大きな選択もできないと思うので、他の人の意見を積極的に取り入れたり、視野を広げているいろいろなことを知ったりするなど、「受け身」の姿勢を改善したいと思う。

☆今までになかった視点や、現地との関わりが深い先生ならではの話が聞けて、見える世界が広がった。実際の質問を通して、自分がいかに点的な視点、日本からの視点でしか世界を見つめられていないことに気付かされた。少しでも正しく平等な視点を持って、世界を見つめられる大人になりたい。インタビュアーになる時に、自分の伝えたい、知りたいと思うこと全てを伝えるのは非常に難しかった。

④ 課題研究班編成

⑤ テーマ設定とフィールドワーク候補先の絞り込み 10月5日(火) 6日(水)

生徒への課題として実施

⑥ フィールドワーク事前学習 10月30日(土) 11月25日(木)

グループ別学習を実施

⑦ フィールドワーク(FW) 11月29日(月)

- ・ 目的：地域にある問題とその原因を知るために、地元の企業、公官庁等を訪問し当事者からの1次情報を主体的に収集する。生徒自らFW先を考え、アポイントを取り、生徒のみで訪問することで生徒の自主性を育てる。依頼書、お礼状の作成等を通してビジネスマナーを身につける。
- ・ 事前学習：9～11月の総合の授業を中心に行う。
 - 9月：インタビュー実践でインタビューの方法を学び、実践演習を行う
 - 10月：課題研究のテーマの絞り込みと訪問先の確定、各班でのアポイント、質問内容の精査
- ・ 内容：FW当日は、56の研究班がそれぞれの視点から地域の課題を発見していくためのフィールドワーク(またはオンラインインタビュー)を行った。訪問先は次頁の通り。
- ・ 成果：今までの実践(ディスカッション講座、インタビュー実践)の効果もあり、生徒の課題解決に対する意欲が高まっていた。具体的には新規FW先を開拓したり、複数のFW先を訪問する班が多く見られた。FWで得た情報や新しい問いを基に課題研究中間発表会に繋げたい。



・ 生徒の報告書より(感想抜粋)

- ☆フィールドワークで、経済格差のみによって教育格差が引き起こされているのではなく、様々な問題が複雑に絡み合っていて、その中で経済格差や教育格差が起こっていることを学んだ。だから、ある一面から見て考えるのではなく、多角的な視野で考えていくことが大事だと感じた。
- ☆高校生でもできることとして、まずは興味を持つことがある。興味を持つ、だけでは意味がないように感じるが、実は興味を持って絶滅危惧種について知るだけで、興味を持つ前とは大きく変わる。自分から色々と調べ、正しい知識を広めていくことが絶滅危惧種を助けることにつながるのでは、と思った。
- ☆多文化共生社会という点ではまだまだで、中国の方が自分の子どもに恥をかかせたくないから自分の国籍を言わないという趣旨のことを話していて、外国の方々が堂々と私たちと一緒に暮らすことのできる社会を作っていくことが課題だと思った。
- ☆性的マイノリティ当事者の方を特別扱いすることは理解者になったとは言えないと思うので、普通に接することが必要だと痛感した。まず自分自身が性的マイノリティをもっとよく理解した上で、制度について多くの人に知ってもらえるよう活動しなければいけないと思った。
- ☆日本全土という大きな範囲では数字で見ると「戦争の影響」も、小さな範囲では数字では表しきれないほどの被害があり、それはデジタルではなく、文書を通して肌で感じることで理解できるものだと感じた。
- ☆FWで学んだ一番大きなことは不登校の生徒に対する支援の視点だ。昔は子どもの登校拒否は単なるわがままだと捉え、とにかく学校に連れて行く、登校すればOKという考えだったが、現在は身体症状、精神症状によって学校に行けないと考えるようになった。このような変化を踏まえて、子どもの心理状態を考えて支援していくことが重要だと学んだ。

11月29日フィールドワーク I 訪問先

組	班	実施先
1	A	信州大学 教育学部 心理支援教育コース 茅野理恵准教授
	B	サンクゼール ワイナリー・レストラン
	C	株式会社エムウェーブ
	D	長野市役所 商工観光部 観光振興課
	E	信州大学 医学部付属病院 こころの診療部
	F	公益社団法人スペシャルオリンピックス日本・長野 K9長野車椅子バスケットボールクラブ(メール回答)
	G	信州大学 人文学部人文学科 文化情報論・社会学 佐藤広英准教授
	H	ながの環境エネルギーセンター
2	A	松本市役所 DX推進本部
	B	環境省戸隠自然保護官事務所
	C	長野県庁 危機管理部 危機管理防災課
	D	軽井沢町役場 観光経済課 観光商工係
	E	セイコーエプソン株式会社 広丘事業所
	F	ながの環境エネルギーセンター
	G	長野県庁 環境部 環境政策課
	H	社会医療法人財団慈泉会 相澤病院
3	A	信州大学 工学部電子情報システム工学科 香山瑞恵教授
	B	長野県庁 企画振興部 地域振興課
	C	信州大学 医学部付属病院 こころの診療部
	D	王子コンテナ株式会社 長野工場
	E	信州大学 人文学部 日本文学 速水香織准教授 信州大学 人文学部 日本現代史 大串潤児教授
	F	一般社団法人軽井沢観光協会
	G	信州大学 教育学部 越智康詞教授
	H	長野市役所 都市整備部 都市政策課 信州地域デザインセンター
4	A	松本市役所 住民自治局 人権共生課
	B	松本市文書館
	C	キッセイ薬品工業株式会社
	D	松本市役所 環境エネルギー部 環境・地域エネルギー課

組	班	実施先
4	E	松本市役所 建設部 都市計画課
	F	ホクト株式会社
	G	長野県庁 健康福祉部 地域福祉課 信州子ども食堂ネットワーク
	H	長野県教育委員会 学びの改革支援課 義務教育指導係
5	A	信州スポーツ医療福祉専門学校
	B	松本山雅
	C	信濃毎日新聞株式会社 長野本社
	D	反貧困セーフティネット・アルプス
	E	長野県庁 総務部 財政課(メール回答)
	F	長野県庁 環境部 自然保護課
	G	白馬村役場 総務課 企画調査係
	H	NHK長野放送局 長野朝日放送株式会社/株式会社長野放送
6	A	長野県教育委員会 学びの改革支援課 高校教育指導係 立科町役場 地域おこし協力隊 須藤佳奈氏
	B	春蘭の宿さかえや
	C	専門学校長野ビジネス外語カレッジ 若竹屋細店
	D	塩尻市役所 健康福祉事業部 長寿課
	E	株式会社サクセン 本社
	F	長野県庁 環境部 環境政策課
	G	株式会社ロゴス
	H	長野赤十字病院
7	A	信州大学 教育学部 心理支援教育コース 茅野理恵准教授
	B	長野県庁 企画振興部 国際交流課 長野県庁 県民文化部 文化政策課 多文化共生・パスポート室
	C	長野県庁 林務部 森林政策課企画係
	D	信濃町役場 総務課 まちづくり企画係 JAながの 信濃町支所
	E	上田市役所 総務部 危機管理防災課 上田電鉄株式会社/千曲川河川事務所
	F	信州大学 工学部 水環境・土木工学科 小松一弘教授
	G	善光寺事務局 庶務課(仲見世商店会)
	H	長野大学 社会福祉学部 佐藤俊彦教授

⑧ 課題研究中間発表会 2月7日(月)・9日(水) ※延期

- ・目的：課題研究で取り組んできた研究を班ごとに発表する。発表において提示された課題についてディスカッションを行う。発表を通して研究成果と課題を確認するとともに、プレゼンテーション技術を高める。また、ディスカッションを通して新たな視点で課題をとらえ来年度の研究に繋げる。
- ・内容：4班ずつ各会場に分かれ、発表と提示された課題についてディスカッションを行う。各分散会に担当教員を配し、発表について指導、助言をする。
※なお、新型コロナウイルス感染拡大を受けて分散登校となったため、当初の予定を変更し、外部講師による指導は行わない。
- ・日程：2月25日(金) 特編② (13:30～14:35) 1年1・2・3・4組
2月28日(月) 特編③ (13:30～14:35) 1年5・6・7組
※まん延防止等重点措置適用を受け、再延期。新年度での実施に向け調整中。

⑨ 課題研究論文作成

- ・1年課題研究例 (プログラムより抜粋)

性的マイノリティの現状と課題	性的マイノリティについて皆さんはどのくらい知っていますか？現状と課題を教えます。
所得と教育の「格差」について	現在広がりつつある所得格差と教育格差。その背景に隠されている事実、解決策とは？
生活が変わる!?新たな学習様式～AIによる学習支援～	少しずつ学習に導入されつつあるAI。これからの学習での活用方法に着目し、研究を行いました。
地域医療の社会貢献	コロナ禍での人の接し方を調べるために医療に関係する企業が行う社会貢献について調査しました。
青年期の心の発達	精神疾患をもつ子どもや不登校になる子どものために私たちに何ができるのか研究してわかったこと。
満州事変から終戦までの長野県～満蒙開拓団派遣者数日本一の真実と疎開先の長野県～	満州事変から第二次世界大戦終結までの十五年間が長野県に与えた影響について研究しました。
21世紀の長野市のリ・デザイン	人口減少、少子高齢化が問題となる今の時代に合わせた新しい街づくりを考えます。
長野県の貧困の実態と対策	長野県庁と子ども食堂の方々から直接お話を伺って長野県内の貧困の現状と対策を調べました。
長野県の健康と食生活	長野県の平均寿命と食生活の関係を、ホクト株式会社さんにお聞きして調べました。
災害時の避難所生活について	避難所生活の向上について、ダンボールベッドという視点から企業の取り組みについて調べました。
松本市の景観計画	自然と歴史が共存し特徴的な景観を持つ松本市の景観計画を調べ、その特徴や課題を探りました。
県内地域の活性化について	僕たちの班は、県の地域振興の活動に興味を持ち、県庁に行き県の現状を聞きました。
長野とグローバル	グローバル化が進む昨今、長野市に求められることを、特に観光の面から調べました。すると…
食品ロス削減のために	食品ロスの現状を知るために松本市に視点を当て、お聞きしたことを考察、今後の課題を示しました。
社会情勢と文学	戦争と文学の繋がりについて、戦争、文学それぞれの視点から調べてきたことをまとめる。
どうすれば長野県の学力が向上していくのだろうか	全国学力学習状況調査の結果等から疑問に思ったことについて県教育委員会にお話を伺いました。

2 「SDGs から見た長野のグローバル戦略」(総合的な探究の時間)

授業内容

① オリエンテーション「2学年課題研究について」 4月17日(土) 学年全体

- ・目的：課題研究テーマ設定、研究テーマ別グループの決定
- ・内容：年間予定の確認。今年度は個人研究となるため、各個人が課題研究テーマを設定。昨年度のテーマを引き続き研究する、または新たなテーマについて研究する内容を決定。
- ・成果：個人研究となったため、様々なテーマが設定された。昨年度の継続よりも新たなテーマで研究を進めたい生徒が多かった。個人研究のため、より自分の興味関心のあることを積極的に研究する姿勢が見られた。

② FW先の決定・各自の研究テーマの具体化 4月27日(火) 5月11日(火) 12日(水) 授業1 2

- ・目的：自分の研究テーマを具体化し、そのテーマにつながるFW先をホームページ等から検索し確定する。
- ・内容：自分の研究テーマを具体化する。インターネット等でその研究テーマに関連のあるFW先をさがす。授業後半では6～7人の班を作り各自の研究テーマについて発表する。
- ・成果：テーマがなかなか具体化しなかった生徒もグループで発表する中でテーマに対する疑問点、問題点などが具体化されてきた。FW先についても決定でき始めている。



③ 先行研究リサーチ&プレゼン資料作成 5月25日(火) 6月9日(水) 授業3

- ・目的：自分の研究に関わる先行研究リサーチを行うことで、独自性のある問いを立て、研究テーマを深める。生徒のコミュニケーション力を高めるため、グループでの発表を継続する。
- ・内容：先行研究リサーチを行い、研究概略をGoogle スライドにまとめる。1人3分程度でスライドを用いた発表をする。
- ・成果：今年度より生徒全員がiPadを持つことにより、スムーズな先行研究リサーチができた。生徒間で意見交換を行うことで、研究の質を高めることができた。

④ FWアポイント取り&先行研究リサーチ 6月22日(火) 23日(水) 授業4

- ・目的：生徒自らFW希望先にアポイントを取ることで自主性や社会性を養う。また、先行研究リサーチを行うことで、独自性のある問いを立て、研究テーマを深める。
- ・内容：FW希望先へのアポイント、Google scholarを利用した先行研究リサーチ。授業のまとめとして今後の研究の進め方についてアドバイスをし合う。
- ・成果：今年度は個人研究のため、例年になく多くの生徒がリーダーとして、FW希望先へのアポイント取りを行った。直接社会人の方と連絡を取ることのハードルは高いと感じた生徒もいたが、よい経験となった。今後の様々な面でこの経験が生きてくることを確信した。授業のまとめとして、調べた先行研究の内容を報告し合うことで、今後の研究について各自の課題が明確になった。

⑤ FWへ向けてのプレゼン準備・必要書類の作成 7月7日(水) 授業5

- ・目的：FWで用いるスライドの完成。FW計画書、FW先への依頼書を作成。
- ・内容：FWのプレゼンで用いるスライドを完成させる。必要書類であるFW計画書、依頼書を完成させる。
- ・成果：FW先も確定し、より具体的な意識を持ってFW準備に取り組むことができた。個人研究のため人任せにすることはできず、より自主性を持って活動することができた。

⑥ FW当日 7月19日(月) 授業6

- ・目的：研究を進めるうえで生徒の立てた社会課題の仮説に対し、FWによって得られた一次情報を活用して課題発見につなげていく。

- ・内容：今年度より個人研究によるFWとなったため、多くのFW先に訪問することとなった。同じ訪問先でも各自それぞれの研究テーマについてFWを行った。同一訪問先を1班とすると、179班がFWを実施。新型コロナウイルス感染防止対策としてオンラインでのインタビューを行った班もあったが、多くの班は対面で研究概要をまとめたGoogleスライドを用い、先方に対してプレゼンテーションを行うことができた。生徒の自主性・自律性を高める目的で、原則として教員は同席しない。
- ・成果：個人研究としてのFWであったためその研究テーマも多岐にわたっており、FW先も去年の2倍以上となった。個人研究のためより自分の興味関心のあることに特化することができ、内容のある実り多きFWとなった。



◎生徒の感想

☆教育は誰もが通る道だからこそ、全員の価値観が交錯し合う根深い分野で、規模が大きく圧倒されてしまったが、自分なりの答えを見つけられるようにしたい。偉大な先生方との出会いが良い刺激になった。

☆コロナの影響や高齢化などの諸問題に対応していくためにも、柔軟な考えを持つことは観光業だけでなく、飲食業や他業種でも大切になってくると学ぶことができた。

☆新型コロナウイルス感染症について、連日ニュースからの情報でしか学ぶ機会がなかったが、今回、金井先生から話を伺って、深掘りして理解していく上で新たに知ることも沢山あり、現状についてよりしっかりとしたデータを知ることができたのはとても価値があった。

☆フィールドワークを通して、貧困問題を解決するためには、まず地域とのつながりについて考え直すことと、私たちが自ら進んで周りとの関わりを作る主体性が大切だと感じた。

☆外国人労働者が特に感じている差別感や孤独感の原因として挙げられるのは言語や文化の違いだ。多文化共生の意識を広められるような活動で、高校生の私たちにもできることはないのか、これから考えていきたい。

☆地球温暖化について鍵となるのは「発信力」。私たちが個人として何かをやるということは難しいかもしれないが、家族や地域など複数人で集まって取り組みを行えば発信力はより大きくなる。そのために私たちが率先して行動し、最初の「きっかけ」を作ることが重要だ。それが「関心を持つ」ということなのだと思う。

⑦ FW お礼状の作成・FWでの活動報告 7月20日(火) 授業⁷

- ・目的：FW先へのお礼状の作成。FWを行っての感想の発表。
- ・内容：FW先へのお礼状を作成する。グループに分かれてFWの様子、感想を発表する。
- ・成果：個人研究のため多くの生徒がFW先へのお礼状を作成した。メールに慣れている生徒にとっては、正式な封書によるお礼状の作成はとてもよい勉強になった。それぞれのFWの様子を共有することにより、今後の研究につながるヒントを得ることができた。

◎FW 先一部抜粋

長野県教育委員会 学びの改革支援課	北信発電管理事務所	新潟大学 農学部農学科
長野県教育委員会 事務局スポーツ課	株式会社ながのアド・ビューロ	一般社団法人サキベジ推進協議会
信州大学医学部附属病院	早稲田大学 入学センター	生活協同組合コープながの
「長野県は宇宙県」連絡協議会	信州大学教育学部附属長野中学校	ホームセンタームサシ長野南店
NPO 法人ながの動物福祉協会	長野県立こども病院	多摩美術大学環境デザイン学科
株式会社ロゴス	信州大学 工学部 電子情報システム工学科	長野市役所 環境部 生活環境課
中町商店街振興組合	公益財団法人ながの観光コンベンションビューロー	帝京大学 外国語学部
松本市役所 産業振興部 商工課	長野グランドシネマズ	長野市上下水道局 水道整備課
一般社団法人長野県eスポーツ連合	あさひ薬局	信州松代観光協会
一般社団法人長野県環境保全協会	長野市役所 総務部 危機管理防災課	信州大学 教育学部 図画工作・美術教育コース
軽井沢プリンスショッピングプラザ	自然電力株式会社	うえまつ整形外科・リハビリテーション科クリニック
軽井沢プリンスホテル ウェスト	長野県環境保全研究所 大気環境部	NPO 法人ポブラの会
長野市国民健康保険鬼無里診療所	飯田市教育委員会 学校教育課	SASUKE完全制覇者 森本裕介氏
長野県精神保健福祉センター	株式会社ドン・キホーテ	株式会社ユーグレナ
長野地方裁判所	長野市役所 地域活動支援課	信州大学 経法学部
長野市権堂商店街協同組合	株式会社マルヒ	飯山市立飯山小学校
株式会社アースワーク建築設計事務所	長野県庁 健康福祉部 医師・看護人材確保対策課医師係	東洋大学 社会学部社会心理学科
上田市役所 商工観光部観光課	長野市役所 環境部 環境保全温暖化対策課	長野県庁 環境部 環境政策課企画係
上田市役所 農林部 農政課	長野県庁 危機管理部 新型コロナウイルス感染症対策室	福井県鯖江市役所 市民活躍課にぎわい推進室（JK課）
上田市役所 商工観光部観光課	伊那食品工業株式会社	白馬村役場 総務課企画調査係
NPO 法人キッズドア	株式会社 電弘	産業技術総合研究所臨海副都心センター
NPO 法人フードバンク信州	長野県庁 県民文化部人権・男女共同参画課	長野県警察 交通部 交通企画課
株式会社スタジオサヤップ	長野市ICT産業協議会	明治学院高等学校
成田国際空港株式会社	東日本旅客鉄道株式会社	信州大学 工学部建築学科
株式会社デリシア	長野県長野養護学校	長野県中央児童相談所（児童相談所広域支援センター）
信州ITバレー推進協議会	公益財団法人日本スポーツ協会 スポーツプロモーション部国内課	公立大学法人長野大学 社会福祉学部社会福祉学科
信州スポーツ医療福祉専門学校	長野医療生活協同組合 長野中央病院	長野商工会議所
信州大学 教育学部	長野日産自動車 長野大橋店	株式会社 inaho
信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター	中野市役所 政策情報課 政策推進係	長野県警察本部 生活安全部 サイバー犯罪捜査課
スポーツデポ長野店	信州大学 経法学部総合法律学科	PwCコンサルティング合同会社
スシロー 長野若宮店（株式会社あきんどスシロー）	長野県立大学 グローバルマネジメント学部	弁護士法人すそ花法律事務所
株式会社ユニリタ	法務少年支援センター長野（善光寺下の青少年心理相談室）	長野県立美術館
伊那市役所 企画部企画政策課	長野市役所 都市整備部 公園緑地課	長野管公学生服株式会社 長野営業所
株式会社テレビ信州	京都精華大学マンガ学部マンガ学科	長野韓国教育院
東京都市大学総合研究所	スノーピークランドステーション白馬	長野市立東部中学校
長野県庁 産業労働部 労働雇用課	長野市城山動物園	須高猟友会 小布施支部
特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト	長野県立大学 健康発達学部 食健康学科	株式会社まちづくり長野
長野整形外科クリニック	長野市保健所 食品生活衛生課	長野県庁 健康福祉部 食品・生活衛生課
長野市民病院	株式会社マイナビ 長野支社	株式会社ブイック
長野地域振興局 総務管理課 県民生活係	東北大学大学院 文学研究科・文学部	長野市リサイクルプラザ

⑧ プロジェクト発表会と個別研究のテーマ決定 8月31日(火) 9月11日(水) 授業⁸

- ・目的：12月15日(水)のプロジェクト発表会に向け、各自の研究テーマを決定。
- ・内容：FW実施によって明確になってきた新たな課題を踏まえて、プロジェクト発表会へ向けての研究テーマを決定する。
- ・成果：FWを行うことで新たな課題が見つかった生徒が多かった。12月の発表会に向けてさらなる探究を続ける意欲が感じられた。

⑨ プロジェクト発表会の発表形式決定と個人研究テーマ決定 9月14日(火) 15日(水) 授業⁹

- ・目的：12月15日(水)のプロジェクト発表会に向け、各グループでの発表形式を決定。ここで発表する個人研究テーマ決定。
- ・内容：Google フォームを利用した個別研究の内容に関するフォームに回答。(この回答を元に、本校教員やコンソーシアムの方々が生徒にアドバイスする。)
- ・成果：プロジェクト発表会とは、クラスごと10人のグループの生徒が90分の発表会を企画・運営し、それぞれの課題研究を発表するものである。発表方法や発表会の形式はすべて自由であり、ディスカッションを重ねることで、生徒自身が発表会を企画・運営することを意図としている。グループごとに様々な意見を出し合い、発表形式を模索する姿が多く見られた。

⑩ 研究テーマを深める 10月12日(火)・13日(水) 授業¹⁰

- ・目的：12月15日(水)のプロジェクト発表会に向け、各グループでの発表形式を決定。ここで発表する個人研究テーマの内容を深める。
- ・内容：12月15日(水)のプロジェクト発表会に向け、本校教員、運営指導委員である慶應義塾大学 清水唯一朗先生、コンソーシアムである信州大学 森下孟先生、株式会社八十二銀行 新村雄太氏、東京海上日動火災保険株式会社 田中伸篤氏のアドバイスや、生徒間でのディスカッションを通して自主的・自律的に問いを深めた。
- ・成果：本校教員、運営指導委員、コンソーシアムの方からのアドバイスによって、生徒それぞれの研究テーマをより深めることができた。

・各方面からのアドバイス

研究テーマ	本校教員より	その他の先生方より	
再生可能エネルギーによる発電の効率化	新しい提案を期待しています。長野の再生エネルギーと言っても規模が様々ですね(長野市、地域、家庭)。実現できそうな規模から考えてみるのも1つの方法だと思います。	実際に活用されている現場にFWに行ってみて、よいところだけではなく、不便なところ、改善が必要なところなども聴いてこられると、「再生可能エネルギー万歳！」で終わらない、みんな自身が作っていく未来につながる話になりそうですね。 (慶應SFC・清水唯一朗)	豊富な水と森林に囲まれた長野県は、小水力発電、木質バイオマス発電、太陽光発電等、再生可能エネルギーを県外へ供給することができるポテンシャルを秘めています。カーボンオフセットによって排出権を売買する時代が到来した際に、長野県が再生可能エネルギーの領域で日本を牽引する存在でありたいと思います。(東京海上)
教育格差を是正する	教育サービスを企業活動としてとらえ、どのようなサービスを提供できるのかという視点と、公共財として国や地方公共団体がどのようなし	仮説もうまくたっており、いいですね。研究の醍醐味は、原初的な仮説が、リサーチと分析によって更新されていくことにあると思うのだけれど(調べるほどにわかることが増え、同時にわからないことが増えてくる!)、どうですか?あと「家庭	低価格で質の高い教育サービスを提供するには何をどうしたらよいか、自分なりの考えをまとめてみましょう。企業は儲けがなければ、そこで働く人たちが生活していけません。質の高い教育サービスにはそれなりの手間と時間、労力が

	くみが作れるのかという視点と両方考えた上で、どちらかにテーマを絞った発表になってもよいと思います。	状況」では、学習する習慣があるかどうかということも議論されるよね。MONOGUSAさんの取り組みなどが面白いかも。 https://ict-enews.net/2021/10/06/monoxer-3/ （慶應 SFC・清水唯一朗）	かかります。それを保証しつつ、低価格にするためにはどうしたらよいかを考えてインタビューするとよいと思います。（信州大学・森下孟）
耕作放棄地の実態から地方の衰退を考える	この問題は行政による解決（法整備、制度の制定等では）解決が難しいと思います。実際に耕作放棄をせざるを得なかった人に直接取材して生の声をきくことができると、研究がより深まると思います。	この団体は、小布施で耕作放棄地を使って、災害時に自分たちで対応できる力をつける活動をされていますよ。（慶應 SFC・清水唯一朗） 日本笑顔プロジェクト https://egaonowa.net/	耕作放棄地問題は地方衰退のみならず食料自給率にも関わる重大テーマです。それだけに、まずは現状把握とともに「なぜ耕作放棄地が生まれるのか」といった背景をしっかりと調査してみたいかでしょうか。その調査結果に対して、これまで打ち出された対策を調べ、それが本当に効果的だったのか分析してみると、このテーマの本質がより深く見えてくると思います。（八十二銀行）

⑪ プロジェクト発表会へ向けての中間報告会 10月26日（火）・27日（水） 授業 11

- ・内容：プロジェクト発表会へ向けての中間報告会を行う。実際に発表する中で更なる課題を確認。
- ・成果：プロジェクト発表会へ向けて各自の新たな課題を確認できた。

⑫ リハーサル 12月7日（火）・8（水） 授業 12

- ・内容：翌週のプロジェクト発表会に向けて、本番と同じ形式でリハーサルを行うことで、発表方法や機材等の最終確認を行う。
- ・成果：プロジェクト発表会がいよいよ迫り、グループごとの様々な発表形式が試された。個人の発表についても細かな変更点、iPadの接続方法など入念に確認することができた。

⑬ プロジェクト発表会 12月15日（水） 授業 13

- ・目的：発表会の企画・運営方法をすべて生徒が行うことによって自律性や主体性を身につけ、課題研究の成果を報告、共有し、評価を受ける。1年生は2年生の発表から研究テーマや手法を学ぶとともに質問力を磨く。
- ・内容
 - 1) プロジェクト発表会（午前）
クラスごとに編成する10人のグループで90分間の発表会を企画・運営し、各会場2年生10名、1年生20名が聴衆として参加。会場ごと教員1名が配置され、講評を行う。
 - 2) 課題研究発表会（午後）
個人単位の研究で特に優れたものを6名選抜し、代表として発表する。大体育館を会場にして行った。長野県立大学グローバルマネジメント学部長 森本博行教授、信州大学工学部 中村正行教授、世界の台所探検家 岡根谷実里氏に審査委員を務めてもらった。
- ・成果：聴衆が沢山いる前での発表は緊張感もあり、発表した生徒にとってはとてもよい経験となった。人に自分の考えを伝えることの難しさを実感し、また1年間研究してきたことへの満足感もあり、充実した発表会となった。1年生にとっても、先輩の発表を目の当たりにし、来年度への意欲が湧いてきたと思われる。



◎ 2年生の感想

(プロジェクト発表会)

☆自分の研究結果のみならず、それをどう未来や自分のステータスに繋げるかを考えている発表者が多く驚きを感じた。ただ事実を説明するのではなく、それで何をしていくのか、色々な個人のプランがあり凄かった。

☆1年生の時のFWから学んだことを生かした研究が多く、問いや仮説、疑問が深掘りされていて興味深かった。自分も多方面の観点から研究をすれば良かったと思った。

☆聴衆に語りかけたり、質問に答えてもらったり、実際に何かをやらしてもらったりして、それで得た意見を交えながらプレゼンを進めている人がいて、大切な技術だと思った。

☆個人的には、自分の伝えたいことを伝えることができたように思うが、一方でもう少しパフォーマンスに工夫ができれば良かった。個人の興味、進路方針に従いつつ、長野を見直すことができる良い機会だった。

☆全体の進行として、タイムキーパーを作っておくべきだった。プレゼンにおいて、内容以外の部分で立ち方や声の大きさ、視線も伝える上で大事になってくるのがわかった。練習の段階で時間配分しておくべきだ。

(個別課題研究発表会)

☆研究に関して「解決すべき現状の課題」「解決するための方法の仮説立て」「実験・検証」「最終提言」という内容をいかに聴衆に向かってわかりやすく伝えるか、構想を練りに練った。最終的に自分の納得がいく最終提言・スライドを完成することができたため、自信を持って発表に臨むことができた。

☆「ここまで研究しているのか」と驚くほど皆の研究が充実していて圧巻でした。研究の動機から提案までのプレゼンの道筋が綺麗に引かれていて、聞きやすく飽きさせない工夫があつて凄かった。

☆審査員の先生方も話していたが、自分の研究に対して今のアプローチでいいのか、その方法がベストなのかを考えて行動しなければただの遠回りになってしまうということが分かった。

☆発表内容の多くが地域活性化の側面を持つものだったので、違う観点から見たアイデアを知られたのは面白かったが、もっと方向の違う内容も見かけた。

☆実際に研究したことを実践する段階までいっているのが良い。調査だけで終わらず、行動に移せている部分がある。自分も調べ学習で終わらせずに、社会に役立てられるようにしたい。

◎1年生の感想

(プロジェクト発表会)

☆印象に残ったのは、調査を通して考えたことを自ら実行に移しているという点だ。服の廃棄の問題について調べたら、服を大切にしてお下りの服を着る。自分の特技を活かし、必要とされているものを自ら作って、企業に直接お願いしに行く。考えるだけ、知るだけでなく、行動を起こすのは簡単なようで難しいと思う。私も、自分たちのグループで調べたことをそのままにせず、自分から考えを広げていきたいと思う。

☆聞き手を飽きさせないために、聞き手への問いかけ、挙手、話し合いなどの時間も取り入れた方が良かったと思った。また、多くの人の発表を聞いたことにより、どのようなスライドだと自分の考えが伝わりやすくなるのか、見やすいのかということが来年の自分の発表の参考になった。

☆FWをした結果、思っていたことと違う答えが返ってきた時も、そこから見えてくる課題に着目するなど全員の結論に納得させられた。プレゼン後の先生のお話で「常識にチャレンジする」という言葉が印象に残った。来年の研究テーマを考える際に参考にしたい。

☆一人ひとりが全く違うテーマで自分が調べたいことであるから、とても楽しそうに発表していたのが印象に残った。自分自身の今後の研究では、テーマについて調べてそこから様々な視点を見出し、新たな提案をしたい。

☆発表者と聞いている人がつながれるよう、ディスカッションの場を多く作っていて、より有意義な時間になっていたと思う。

☆自分の興味のない分野は意識しないと考えることはないので、色々な意見の発表を聞くことができ、調べてみたいことが増えた。

(個別課題研究発表会)

☆課題解決への明確なビジョンが定まっており、根拠があり現実的な提案をしていた。身近なところからテーマを広げていた。具体的な行動も大事だと思った。

☆漠然とテーマに関して考えるだけでなく、自分達がどう関わられるかを主体とした発表や、自分の計画を立ててその効果を考え反省までする発表といった、一歩踏み込んだものが多く、とても参考になった。発表を聞いて、問題提起→調査→結論の流れを繰り返して理解を深めていくことが大切だと分かった。

☆6人の発表を聞いて、発表者が何を一番に伝えたいのか発表からはっきりと感ずることができた。発表の中でも疑問を投げかけるところ、事実を言うところ、自分の意見を言うところのメリハリをつけると相手も聞きやすいし、言いたいことが伝わりやすいと思った。

☆質疑応答にとっても丁寧にかつ迅速に対応できていたのは、自分の研究をしっかり把握していたからだと思うので見習っていききたい。身近な問題に対してどの発表者も行動を起こしていたのが素直に凄いなと思った。

課題研究部門結果

最優秀賞	2年1組 堤 知遥	「地球温暖化を減速?!～ミドリムシに秘められた可能性～」
優秀賞	2年4組 野池 真緒	「動物園における環境エンリッチメント」
	2年7組 飯田 美奈	「公共施設マネジメント～廃れる街と膨れるインフラ負担～」
校長賞	2年2組 山岸 南穂	「持続可能な観光業とは」

・生徒の研究テーマ一部抜粋

今子供に求められている、これから生きる為に不可欠な能力とは？	ICTの今後	エネルギーの面から地球温暖化を考える
食品ロスと飢餓問題	発達し続ける技術とその裏で生じる数々の問題	AIと接客業
幸せになれる空間づくり	現代の司法の改善点を探る	水道事業の現状とこれから～将来水は飲めなくなる!?～
幸せになれる空間づくり	日本の教育の進歩	都市緑化の展望～これからの都市緑化はどうあるべきか～
これからの時代。「私たちの食事はどう変化し、またどう変わって行くべきなのか。」	大型ショッピングモールが及ぼす影響と将来	多様化する大学入試制度
遠隔医療の意義と今後の推進について	SASUKE出場から完全制覇までに必要なこと	これからの観光
悩みの聞き方	野外教育	現在はどうなのソフトウェア、ハードウェアに需要があるのか
教育の変化と社会の変化	AIで魅力的な農業へ	教育格差を是正する
信頼される人になるには	理学療法士	「故郷」のふるさとから考える地方創生
ゲノム編集食品が受け入れられるには	リノベーションは長野市にメリットを与えるのか	スマホとの付き合い方
医療にAIは必要か	現場から学ぶ理学療法	暮らしを支えるAI
魅力ある暮らしと町おこし	野生鳥獣と農作物の被害について	『個性』を受け入れる社会を創る
労働環境からみる医療現場の実態	子供のための「教育」とは	ICT教育の未来
過疎地域における医療施設の重要性	救命医療のいろいろ	心のサポート
里親に関する現状と課題	英語教育はいつから始めるべきか	制服とジェンダー
AIの実用化に向けて	日本の教育の変化	こども食堂の居心地を良くするには
再生可能エネルギーによる発電の効率化	スポーツを広めていくために	エンターテインメントは不要不急か
人生の多様性	AIと福祉	英語教育の変化と課題
話す言葉の違いによる課題と解決策	災害時の避難をスムーズに行うために	コミュニケーション
消費税のウソ～日本は財政破綻するのか～	小水力発電の可能性	運動?スポーツの推進
核兵器は廃絶されるべきか	これからの医療に求められること	持続可能な観光業とは
地球温暖化を減速! ? ～ミドリムシに秘められた可能性～	「身近な自然」から考える環境問題	医療従事者の長時間労働を防げ!
心の状態による体への影響	美術教育の価値とは	なぜ日本人は英語に苦手意識を持つのか
商品の陳列方法の心理学	スポーツ障害で苦しむ人を減らすためには?	医療のないところに医療を届けよう
オタクの心理の活用方法	英語を操る	循環型社会における古着リサイクル

⑭ ミニプロジェクト発表会・プロジェクト発表会のまとめ 12月21日(火)22日(水) 授業 14

- ・目的：グループの組み合わせを変え、個人研究の発表を行う。
- ・内容：プロジェクト発表会当日とは別のグループで個人研究の発表会を行う。
- ・成果：プロジェクト発表会当日に聴くことのできなかつた発表を聴くことができた。様々な生徒の研究に触れることができ、今後の参考になった。

⑮ 課題研究レポート作成 1月18日(火)19日(水)2月1日(火)2日(水) 授業 15 16

- ・目的：2年次のFWや研究などを総合的にまとめた課題研究レポートを作成する。
- ・内容：Googleドキュメンを用い、プロジェクト発表会で発表したスライドの内容をまとめる。
- ・成果：1年間の探究活動の総括となる課題研究レポートを作成することができた。テーマ設定、FW先の決定、プロジェクト発表会へ向けての探究など今年度の学習を総括するよい機会となった。

3 「グローバルアカデミア」(総合的な学習の時間)

授業内容 (B 週月曜日 通常授業)

① 企画会議 4月12日(月)・26日(月)

- ・目的：国際会議へ向けた企画及び準備
- ・成果：会議への主体的な参加、オンラインでのコミュニケーションマナーの学習

② 事前学習会【オンライン Google Meet を使用】 5月10日(月)

「次のパンデミックに備えたまちづくり」をテーマにオンライン研修会を実施

- ・講師：倉根明徳氏 (信州地域デザインセンター コーディネーター)
- ・目的：国際会議へ向けた事前学習
- ・内容：海外の事例などをもとに、コロナに強いまちづくりとはというテーマで講演をいただき、質疑を行った。
- ・成果：国際会議での議論を進めるにあたり、本校生徒内での共通理解が出来るとともに、オンラインでインタビューをする経験を積むことができた。(なお3年生は、この機会以外でも、様々なオンラインプロジェクトに参加して、オンラインでのコミュニケーションについて経験を多く積んでいる。)



「海外の人たちと協働する際に心がけること」をテーマに社会人の方からの研修会を実施

- ・講師：中山将司氏 (パナソニック株式会社)、西林祥平氏 (パナソニック株式会社)、向井裕人氏 (グライドパス株式会社代表取締役)
- ・目的：国際会議へ向けた事前学習
- ・内容：海外の人と協働する際の心構え、会議の進め方、成功の秘訣などについてレクチャーをいただき、質疑を行った。
- ・成果：「相手に100パーセントを求めないこと」「何度も説明すること」「挨拶やお礼の言葉はその国の言語で伝えること」など実践的なお話を聞くことができ、ディスカッションへの不安感を払拭することができた。

③ SDGs 地方創生会議 国際会議「グローバルアカデミア 2021」 5月22日(土)

- ・目的：①グローバルファシリテーター教育の成果を発表する。
②地域の協働を通じた「新しいグローバル教育」の場を地域に提供する。
③SDGs 課題に対する提言を広く発信する。
- ・内容：長野高校生徒が校外の学生・社会人などと混合で少人数のグループをつくり議論する。
第1部では David Bromell 氏 (Victoria University of Wellington 教授) よりオンラインで「次のパンデミックに備えたまちづくり」というテーマでプレゼンテーションを行っていただいた。最後に3つのディスカッショントピックが与えられた。
第2部では4つの分科会に分かれ、ディスカッションを行った。トピックは以下の通り。
“Can you think of 10 compelling reasons why people in Tokyo should escape the city and come to live in Nagano?” (都市を離れ長野に住むようになる説得力のある理由が思いつくか)
“The government gives you ¥500M to invest in physical and social infrastructure to help attract people to live in Nagano. What will you spend it on, and why?” (長野の社会基盤に5億円投資できるなら、何にどう使う?)
“Describe the kind of city where you could live a healthy, safe and happy life. What would it look like? Would it be different from Tokyo, Yokohama or Osaka as they are today?” (健康的で、

安全で幸せな生活が送れる街とはどのような街か。大都市との違い。)

このような問いについて各分散会 5～6名の参加者と意見交換を行った。第3部では、ディスカッションをもとに、各分散会のファシリテーターがYouTubeを通し、提言を発表した。David氏からも講評をいただいた。



・参加者

①分散会参加者 ※敬称略 ◎はファシリテーター

Team: SOYOKA (チームそよ花)	学校など	国籍など
◎横山そよ花	長野高校	
中澤貫太	長野日大高校3年	
Kadota Koga	米国高校生	アメリカ
Chris Clancy	ALT	アメリカ
Eve Kennedy	オーストラリア高校生	オーストラリア
Morghan Bradley	オーストラリア高校生	オーストラリア
書記：小林奈々、撮影：小林将人	長野高校	
Team: MIWAKO (チーム 美和子)	学校など	国籍など
◎山崎美和子	長野高校	
土屋京香	大学1年生	本校卒業生
Tanmay	APU学生	インド
Chuchu	APU学生	中国
小島一恵	社会人(アメリカ在住)	日本
小島弥優	長野高校	
書記：池田もも、撮影：増田朱里	長野高校	
Team: RYO (チーム 瞭)	学校など	国籍など
◎高瀬瞭	長野高校	

Ping	台湾の高校生	台湾
松本那奈子	大学1年生	本校卒業生
富口真衣	APU 学生	日本
Izzatillokh	APU 学生	ウズベキスタン
町田莞太	長野高校	
書記：大出夏芽、撮影：宮坂玲志	長野高校	
Team: YUUKA (チーム 悠花)	学校など	国籍など
◎東田悠花	長野高校	
中村咲喜花	大学1年生	本校卒業生
跡部里紗	長野高校	
Kenzie	APU 学生	インドネシア
A Thi Hong Hanh	APU 学生	ベトナム
書記：中村明日歌、撮影：牧内ひかる	長野高校	

②アドバイザー

David Bromell (Victoria University of Wellington 教授) 【ニュージーランドから参加】

- 成果：①様々なバックグラウンドを持つ人々と議論をし、提言をまとめ、発信できたこと。
『コロナのようなパンデミックがあっても人と人がつながることのできる社会』『感染リスクの軽減、安全な通勤通学の観点から自転車専用道路を作る』『雇用を生み出し続けられる街』などの提言が出された。異なる立場の人たちと議論することで、他国の様子を聞き、新たな価値観を学んだ。
- ②「グローバルな学び」の場を、生徒が主体的に創り出したこと。生徒たちのいままでのつながりから参加者を集め、進行、運営を生徒自身が行った。また、周知ポスターや YouTube のサムネイル（待機画像）も生徒たちが作成した。

・生徒の感想より

☆話し合いの中で、何度も“つながり”という言葉が聞こえました。

『つながりのない、イベントのない、人とのかかわりがすくなすぎる街はつまらない』

今回の会議、始まる前は自分の語学力でどこまでのディスカッションができるのか不安でたまりませんでした。いざ、会議が始まるとメンバー全員がどんどん考えを発言して、ほかの人が言ったことに乗っかったり、実際に自分が経験したことをもとに話し合うことができ、すごく盛り上がりました。APU の学生さんも日本語が話せたので最終的には日本語で話し合いをしましたが、国際交流ならではの様々な視点からの話し合いは始終ワクワクするものでした。「人のつながり」はやはり貴重です。沢山の学びとワクワクをもたらしてくれます。そう教えてくれたこの国際会議は良い経験になりました。

☆同じ文化圏、国の仲間たちと話し合いをするのも面白いですが、バックグラウンドの全く違う人たちと交流をすると違った視点から物事が見えて、当たり前だと思っていたことが覆されます。いままで良いと思っていたことが悪いことに思えたり、悪いと思っていたことが良いことに思えたりします。改めて何か物事を決めるときには、独断ではなく色々な人の意見を聞く事は大事だと思いました。

☆自分の英語力が足りないことを痛感したが、もっと英語を学びたくなった。自分の英語が相手に伝わっていることがとても嬉しく感じた。とてもいい経験であった。怖じけずに自分の英語で話せるということが、何よりも大切であると感じた。

(David Bromell 氏からの評価)

「議論の大部分が英語で行われており、様々な切り口から議論を進めることができていた。深い議論ができたようだった。(新型コロナウイルス感染症のような)現在の状況に立ち向かうためにも、常に考え続けること、問い続けること、議論し続けることを大切にしてほしい。」



④ ポスター作成・英語エッセイ作成 4/12(月)・26(月)、5/10(月)・24(月)、6/7(月)・21(月)

- ・内容：作成したポスターは文化祭において発表。ポスター・英語エッセイ共に冊子「国際会議グローバルアカデミア 2021(SDGs 地方創生会議) 報告書」に掲載した。
- ・成果：①各生徒が独自にフィールドワークや、アンケート調査、食料寄付といったボランティア活動を行った。諸活動を通し各自で研究結果、考察をまとめることができた。
②ポスタープレゼンを文化祭で行い、聴衆からの質問・意見をもらうことで、各々の研究を更に深めることができた。



⑤ 進路研究 10月～1月

- ・目的：探究学習の成果を進路研究及び進路選択にも活かしていく。
- ・内容：リサーチ、レポートなど

II 仮説2に係る実践

PBL 型の英語教育と教科横断型の学びを通じて、グローバル視点のキャリア観を段階的に育成することで、グローバルファシリテーターとしての資質が養われる。

I 学校設定科目「英語キャリアプロジェクト I」

- i 学年・単位数 1 学年・1 単位
- ii 目標
 - ①状況に応じた英語 4 技能の使用ができるようになる。
 - ②情報モラルを学び、実用的な ICT スキルを高める。
 - ③興味関心を学術的な分野に広げ、教科横断型の学びへの関心を高める。
 - ④グローバル社会で必要とされるキャリアを発達させる。
(「グローバル社会の中で生きる将来の自分像」を意識させた指導)
- iii 年間計画 (1 授業時間 55 分)
 - 4 月～7 月(11 時間)
Self Introduction(自分のことを語る, 通年)・Computer Skill(PC 基礎スキル指導, Google 導入)・Short Speech (発表練習)・Mini Bibliobattle(ビブリオバトル練習)
 - 8 月～12 月(13 時間)
Bibliobattle 準備・English Bibliobattle 大会・ディベート基礎
 - 1 月～3 月(8 時間)
ディベート練習・試合
- iv 評価方法
英語での発信力・運用力・理解力・発表内容(キャリア理解)を評価する。
ICT やパソコンの運用力を評価する。
発表内容・関心・意欲・態度(協働的な学び)等を評価する。
- v 授業方法
ALT と JTE(英語科)の TT によるクラス単位での授業。PC を日常的に使う。
発表に向けた準備を行いながら、必要なスキルを獲得する。
キャリア発達について関心を持たせた指導を行う。

II 学校設定科目「英語キャリアプロジェクト II」

- i 学年・単位数 2 学年・1 単位
- ii 目標
 - ①会議をリードするなど、場に適した英語運用ができるようになる。
 - ②情報機器を使い、離れたところにいる他者と必要な形の協働ができる。
 - ③クリティカルシンキングな視点を持つようになる。
 - ④グローバル社会で必要とされるキャリアを発達させる。
(「グローバル社会における他者の目に映る自分像」を意識させた指導)
- iii 年間計画 (1 授業時間 55 分)
 - 4 月～7 月(11 時間)
発信型英語の基礎・情報ネットワーク活用(通年)・
 - 8 月～11 月(13 時間)
高雄のパートナーとの ICT 交流・Discussion&facilitation 演習・研修旅行・まとめ
 - 12 月～3 月(8 時間)

・ 4 技能スキルトレーニング (ディベート)

iv 評価方法

英語での発信力・運用力・理解力・発表内容(キャリア理解)を評価する。
ICT や PC の運用力を評価する。

発表内容・関心・意欲・態度(協働的な学び)等を評価する。

v 授業方法

ALT と英語科教員との TT によるクラス単位の授業。タブレットを日常的に使う。

前期は、台湾での国際会議へ向けた発表演習とファシリテーションの練習。

後期は、ディベートなど 4 技能スキルを育てる授業を行う。

1 英語キャリアプロジェクト I

授業内容

(1) 4・5・6月 Short Speech 活動

- ・ iPad で写真を見せながら、週末に行った場所や尊敬する人などについて 1～3 分程度のスピーチをペアやグループで練習をする。
- ・ 話すスピード、アイコンタクト、発音や抑揚等に注意しながら、聞きやすいスピーチにする。

(2) 7・8・9月 Mini Bibliobattle 活動

- ・ 10月2日(土)に予定されている「英語プロジェクト発表会」の準備。
- ・ English Bibliobattle で発表をしている大学生のビデオを視聴しながら、ビブリオバトルのルールを学ぶ。
- ・ Reading Oceans 多読アプリから読んだ洋書を紹介する。読んだ感想を、原稿を見ないで自分の言葉で語り、魅力的なプレゼンテーションを目指す。
- ・ 発表は Google Meet を使って遠隔で行う。Google Meet の使用方法やオンライン上での効果的な発表を学ぶ。
- ・ 夏季休業中に、英プロ発表会で紹介する洋書を入手し読み進める。

(3) 10月2日(土)「英プロ発表会」 English Bibliobattle 特別日課

- ・ 1 学年全員が 5 分のプレゼンテーションを実施。
- ・ クラスの枠を外して、10 名ずつの 28 のグループに分かれて、オンライン上で発表をする。
- ・ 司会進行は生徒がすべて英語で行う。
- ・ スピーチの終了後に Q&A の時間をとる。一人一回は必ず質問する。
- ・ 評価は生徒全員で行う。各グループから 1 名のベストスピーカーを選出し、後日表彰する。
- ・ Observer として本校卒業生である大学生や教員、40 名が国内外から参加した。
- ・ 評価項目は①Gesture(ジェスチャー)もしくは Slides(スライドが効果的に使用されていたか)②Content(内容)③Voice Inflection(声の変化)④Pronunciation(発音)⑤Originality(独自性)⑥Overall impression(全般的な印象)について各 3 点、合計 18 点で採点。なお、これらの項目はこれまでの授業の中で一つずつ繰り返して練習してきたものである。当日はその成果を披露する集大成としての発表会となった。



・生徒の感想より

☆始めは英語でスピーチをするなんて無理だと思っていたのですが、発表をする上で最終的には伝えたいことを伝えられたと思いました。方法としては、相手がほとんどの確率で知っていることを例に出して親近感を持たせることをしました。また、スピーチは一人で作り上げるものではないということ学びました。スピーチをする上で周りを巻き込む発表をした方が楽しいし周りも興味を持ってきていいということ学びました。

☆クラスの前での発表は中々緊張した。もっと練習すべきだったと少し後悔したが、質問の受け答えなどしっかりできたので良かったとも思う。ビブリオバトルを通して、スピーチにおける大切なことをたくさん学ぶことができよかった。これからのNGP活動などでも活かしていきたい。

☆今回の経験を通じて、一番印象に残っていることは、英語でコミュニケーションを取ることの楽しさです。質問したり、答えたりする中で、その事を強く感じる事ができました。

☆MC1だったのでテストが終わってからたくさん練習をした。まず、画面に自分がどうついているか知るためにビデオを撮ったり、音声を録音したりして自分のスピーチを何度か見直した。私は絶対にbest speakerになりたかったので目標を達成できてよかった。とにかく今回の活動を楽しめたことが何よりよかった。

☆まず、リモートで英語を発表することが初めてだったのでとても緊張した。同じグループのみんなが、皆クオリティーが高くてすごいと思ったし、発表に対して質問されたことを皆すぐに返答できる対応力が素晴らしいと思った。自分の発表は焦ってしまったり、完全とまではいかなかったが、聞いている人に評価してもらおう機会があったととてもためになった。自分が発表する時も他の人の発表を聞く時も勉強になることがとても多かったので、これから先何かを発表するときにもこの経験を活かしていけたら良いと思った。

☆初めて家からオンラインを通じての行事だったので、家族にも協力してもらったりと自分の中で大きな行事だったと感じています。前日までこの文はこれでいいか、時間が余らないようにもっと文章をたそうか、などいろいろ添削して練習もして本番に臨みました。しかし、いざ自分の発表になると頑張って覚えたつもりの文が緊張で頭から抜けてしまい、紙を見ながらの発表になってしまいました。けれど他のクラスの人の発表は聞いていて楽しかったし、質問にも参加できてよかったです。昔からALTの先生との対話テストが苦手で英語にあまり自信がなかったけれどこのビブリオバトルを経験して、自分に少し自信がついたと思います。経験できてよかったです！

・Observer のアンケートより

☆生徒の皆さんの発表を聞いてとても楽しい時間でした。あらすじをわかりやすくまとめて話してくれたり、写真やスライドを使って発表してくれたりそれぞれの工夫が多く見られました。その本を選んだ理由や好きな場面などを聞いて、自分が読んだ本について知って欲しいという強い気持ちが伝わってきました。オンラインでの実施でしたが接続の問題などもなくスムーズでした。

☆コロナ禍で、様々な発表の場が奪われる中、果敢に挑まれた英語プレゼンテーションだったかと思います。大変、素晴らしいです。事前事後の連絡はじめ、当日の司会進行も生徒さんが行い、VUCA 時代に必要不可欠な力を付けられています。新しい発表の場の可能性を、お教え頂きました。

☆ビブリアバトルは初めての経験でしたが、どの発表者も本の紹介にとどまらず、自分の経験と繋げて話すなど広い視点を持って発表していたため、とても興味深かったです。私自身も久しぶりに英語で本を読んでみようかなと思いました。高校1年生ということはまだ発表経験が多くないのかなと思っていましたが、間の取り方や抑揚の付け方などの工夫をしている生徒が何人もいてすごいなと思いました。

(4) 10月～2月 ディベート活動

・英プロ発表会終了後はクラス内でディベートを学習・練習を行い、最後はクラス内で対抗試合を行なう。

・10月～11月の授業では主に以下のような活動を繰り返してディベートの基礎力を学んだ。

(1) **Activity 1: 「Opinion Building・Why-Because Game」** (意見を作る学習) 相手の statement (例 I like--) に、Why を繰り返す。Why? に対して Because で答えられなくなるまで続ける。Why で追い詰め、Because で防御する、Debate の基本的な技術を学ぶ。

(2) **Activity 2: 「One-minute Monologue」** 身近なことについて、自分が賛成か反対かを1分の monologue にして語る。次々とトピックを変えて即興で話す。

(3) **Activity 3: 「Ping-Pong Debate」** (ピンポンディベート)。反駁の仕方の練習。4人のグループになり、最初の生徒がある問題に対して賛成の意見を述べる。2番目の生徒は、まずその意見を要約し、それに対して理由と事例を用いて否定の意見を述べる。3番目の生徒はそれに対してさらに反対して肯定意見を述べる。4人目の生徒はそれに対して否定側の意見を述べ、1人目が再度それに反駁し、肯定の意見を述べたら終了。まるで卓球のラリー戦のようなので、Ping-Pong Debate と命名している。反駁のバリエーションは以下の7つ。

1. It is not true. (それはちがう) 2. It is not always true. (それは常にそうとは限らない) 3. It is not necessarily true. (必ずしもそうとは言えない) 4. It is not so important. (それは大して重要ではない) 5. It is not so serious. (それは大して深刻ではない) 6. It can be solved. (それは解決できる) 7. It is irrelevant. (それはこの論題とは関係ない。)

(4) **Activity 4 「ミニディベート」** 肯定側立論 (1分) 質疑応答 (1分) 否定側立論 (1分) 質疑応答 (1分) という簡単なディベートを様々な論題で実施する。実施論題: City life is better than country life. / Winter vacations are better than summer vacations. / Dogs are better than cats as pets.

- ・10月～12月「PDA方式によるパラメンタリーディベート」の実践 ECC班のメンバーの出演で製作されたオリジナルのディベート講習ビデオを視聴し、ディベートの試合形式を学ぶ。その後、グループで試合を行う。論題：Nagano HS students should wear school uniforms. / Online school is better than real school. / Having boyfriends or girlfriends is a waste of time for high school students. / Japanese high school students should be more encouraged to do part-time jobs.
- ・1月～2月 新たな4名によるグループをランダムに組織し、「パラメンタリーディベート・クラス内マッチ」を実施（3名がディベーター、1名はジャッジ）。どのチームも4戦（与党肯定側で2戦・野党否定側で2戦）を戦う。すべての試合を生徒が判定し、講評を述べる。論題：High School should introduce e-Sports as a subject. / Anonymous writing should be banned online.

2 英語キャリアプロジェクトII

(1) iPadを用いたスライド作成の練習

・iPadを使い、物語のスライドを作成した。事前にG講師による、例を提示し、作り方を指導した。各グループでどのような作品を作るかを話し合い、グループで一つの作品を提出した。

(2) Video Project・交流へ向けての準備

・iMovieによる、ビデオ編集の方法を学び、台湾国高雄市の高校生に送るための自己紹介ビデオを作成した。また、Googleドライブを活用し、必要な動画を台湾の生徒と共有した。

・高雄市交流高校生に見せる Storytelling Video を作成した。「物語のビデオ」「5分以上」「必ず英語で伝える」といった条件をあらかじめ提示し、グループごとにビデオを作成した。

(3) 台湾とのビデオ交換プロジェクト 10月～11月

台湾高雄市の高校とのオンラインプロジェクト。7クラスが、高雄市内の別の7校に訪問する「7校交流」の代替として実施した。

①概要

a) 目的

- ・英語教育・情報教育の実践の場として、思考力・判断力・表現力を育成するとともに評価する。
- ・協働を通して、主体的に学ぶ態度を育てるとともに、結果としてパートナーシップを構築する。

b) 対象者

2学年生徒全員 台湾の学生約280名

c) ビデオプロジェクトテーマ Video Exchange

d) テーマ設定理由

- ・グループ単位で、物語のビデオを作成し、台湾のパートナーグループと交換する。
- ・事前のオンラインセッションで、物語を口頭で紹介し、英語でどのように伝えるか検討する。相手グループの意見を参考にしながら、ビデオを作ることで、異文化の価値観を取り入れた作品になる。

②経過

a) 1st online session (10月) 【Google Meet 使用】

自己紹介・自分のビデオの紹介をする・英語でどのように伝えるか検討する。

- 1組—高雄市立瑞祥高級中学 10月19日(火)
- 2組—高雄市立高雄高級中学 10月4日(月)
- 3組—国立鳳山高級中学 10月5日(火)
- 4組—高雄市立仁武高級中学 10月6日(水)
- 5組—国立高雄師範大学附属高級中学 10月7日(木)
- 6組—高雄市立高雄女子高級中学 10月20日(水)
- 7組—高雄市立新興高級中学 10月5日(火)



b) 動画制作【iMovie 等使用】

- ・グループごとに協力しながら、5分間のビデオに編集



c) 2nd online session (11月12日)【Google Meet 使用】

- ・グループごと完成したビデオを見せ合い、感想を伝え合った。
- ・本校と交流校でそれぞれ選んだ優秀作品を発表し、交流を図った。

時間	行事
13:30-13:43	開会式 <ul style="list-style-type: none"> ・開会の言葉 ・宮本学校長挨拶 ・国立高雄師範大学附属高級中学校長ご挨拶 ・本日のスケジュール説明
13:45-14:15	グループ交流 ①ビデオの交換 ②ビデオについてディスカッション
14:20-15:00	スクール交流 (長野1クラス対高雄側1校) ①ベスト4ビデオの発表 ②ベスト4ビデオの上映

③成果

○ICT を活用した交流モデルの開発

英語教育と情報教育を融合させた「英語キャリアプロジェクト」の特長を活かして、Google Meet で会話をし、作成した自己紹介動画・物語の動画を見せ合った。また、Google Drive で動画を共有し、仲間と協働で動画作成にあたったことで、グループ内での交流も促すことができた。



○生徒のネットワーク形成

ビデオを制作する過程で交流生徒を含む LINE グループをつくり、やりとりしていた。生徒たちがクラスごと企画する「School Meeting」の時には、お互い連絡をとりながらコミュニケーションを楽しんでいた。

○生徒及び教員のファシリテーションスキル・コーディネートスキルを養う場

時差がある交流校とのスケジュール調整、オンラインでの打合せを通して、経験を養えた。

○生徒の能力開発について (アンケートより)

交流について、「積極的に取り組んだ」という回答が8割を超えており、多くの生徒が台湾学校交流に前向きにとりくみ、ビデオ制作、連絡の取り合いなどを行った。また、「今回のライブ交流は楽しかったですか」の質問に88.8%の生徒が「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回

答していることから、多くの生徒にとって、今後の成長に繋がる学びがあったのではないかと考えている。



・生徒の感想より

☆クラスリーダーとして進行を行い、思い出深い交流会となりました。クラスの皆が良い雰囲気を作ってくれたこともありますし、台湾の高校さんがとても盛り上げてくれてくださったので有意義な時間を過ごすことができました。1回目のオンラインミーティングでLINEを交換してから、部活動のことやお互いの土地のことを話したりして台湾の方々とは交流が続いています。それぞれの国を訪れる機会があれば連絡し合うことも約束しました。この交流会がなければ出会わなかったであろう友人達なので、大切にしていきたいと思います。

☆やる前は英語を話したり聞き取ったりするのが上手く出来ないと思って嫌だったけれど、やってみたら意外と通じていろいろ話すことが出来たので嬉しかったし楽しかったです。英語の意味が分からなくてもお互いに理解しようとしたり説明を変えたりして会話をすることが出来たので良かったですと思います。

☆異文化や、毎日をただ過ごしているだけでは味わえない違った生活などに触れられて滅多にならない体験でとてもありがたいと感じた。私は英語を使うなんて難しいことはできなかったのですがグループの人に任せっきりにしてしまった部分もあったけれど、ビデオの感想を伝えた時にとても拙い英語でも反応してくれたので気持ちは言葉が完璧じゃなくても伝えたいと思えば伝わるんだと思った。少し嬉しかった。

☆当日まで不安感を抱いていたけど、いざ交流となると、相手が積極的に会話してくれたこともあり楽しい時間を過ごせた。また、伝えたいことが英語に直せないというもどかしさ、難しさを感じ、さらに英語での会話の楽しさ、伝えたいことが伝えられた嬉しさをも味わうことができ、有意義なものにできた。

参考資料

【長野高校 ビデオ作品例】

- ・ A Little Boy ISSUN
- ・ Momotaro
- ・ Being scared of Manju
- ・ The gratitude of the crane
- ・ The princess Kaguya
- ・ Urashimataro
- ・ Monkey vs Crab
- ・ Tokisoba
- ・ Straw Millionaire
- ・ The Three Little Pigs
- ・ The Rolling Rice Balls
- ・ Kachi Kachi Yama

【高雄市高校生 ビデオ作品例】

- ・ A Daily Life in Kaohsiung
- ・ The great man of Taiwan
- ・ Audrey Tang
- ・ Teresa Teng
- ・ Mountain Banping
- ・ The story of Mazu
- ・ Tag Along
- ・ Scooter culture in Kaohsiung

(4) 12月～2月 Town Council Debate について

- ・ 一年次のパラメンタリーディベートでは、毎回テーマを変えて短時間の準備で行う形式をとってきたが、1チームが3人では負担が多すぎることと4人のグループでやってきたことを継続したいこと、各自の割り当て時間が長くて使い切れないこと、他の生徒が発表しているときにしっかり聞けない生徒もいたことから、形式を“Town Council Debate”と名付た独自の形に変更して行うことにした。

具体的には、両チームの最初のスピーカー(Opening Speakers)が前に出て、肯定側スピーカーが2つの肯定理由を含んだ1分のプレゼン(Proposition Speech)を行う。次に否定側スピーカーが同じく2つの否定理由を含んだ30秒のプレゼン(Opposition speech)を行う。

次に、第一スピーカー(1st speakers)の二人が前に出て、肯定側スピーカーが肯定側の最初の理由(First reasons)について1分間で詳しくプレゼンをし、それに対して否定側が30秒の反論(Opposition Attack)を、更にそれに対して肯定側が30秒の反論(Proposition Defense)を返す。続いて、否定側スピーカーが否定側の最初の理由について1分間で詳しくプレゼンをし、それに対して肯定側が30秒の反論をし、更にそれに対して否定側が30秒の反論を返す。これで、1st Speakersの戦いは終了する。

つづいて、第二スピーカー(2nd Speakers)の二人が前に出て、1st speakersと同様に行う。

最後に、肯定側の最後のスピーカー(Closing Speaker)がここまでの討論を踏まえてまとめの1分間主張をし、そのあと否定側のスピーカーが同様に1分間の主張をして終了となる。

残りの生徒は配られた用紙にディベートの展開をメモしながら聞いて、最後にどちらの側がより説得力があったかを投票する。皆の前で1票ずつ開票が行われ、勝者が決まる。今年度は、iPadを使った投票を行った。

このような形式で行った結果、それぞれの主張を短い時間にすることで、スピード感のあるスリリングな展開になった。また、聞いている生徒も含めて全員が常に何らかの活動を要求されるので、充実した活動の時間となった。また、事前に肯定側が論題を決め、否定側にそれを伝えて反論の準備をしてもらうことで、議論がより実のあるものとなった。3人のチームは、一人がOpening Speakerと他の役を兼ねるようにした。生徒の感想から、相手側の主張にすぐに反応しなければならないので即興で話すよいトレーニングになり、話す力をつけることへの良い動機づけになったことが分かった。

各グループで1つ【課題と解決策(Proposition)】を考え、事前に提出した。

参考資料

【論題例】

“We should install “basic income” to provide money to all people in Japan.” “Japan should abolish the death penalty.” “Japanese schools should have genderless restrooms.” “We should stop using tablets in school lessons.” “Late students should fill out a form explaining why they are late before being allowed in class.” “Saturday seminars should be abolished.” “School should have time for napping.”



3 リーダー研修プログラム Global Study in Beppu

1 企画について

米国リーダー研修プログラム代替企画として、参加生徒を募集。立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）を訪問し、国際学生らとともに交流、フィールドワークを行う。

2 目的

- グローバル人材の育成に積極的な大学での研修を通して、本校の NGP 事業が目指す「グローバルファシリテーター」の育成に必要な「国際的な対話力」や「リーダーシップ」を身につける。
- 本校の NGP 活動のリーダーとして活躍する生徒を育てる。（研修終了後は NGP スタッフとして、2年次の課題研究、台湾との交流、3年次のグローバルアカデミア、校内外での発表等の活動に積極的に参加・協力する。）
- 国際学生との交流の中で異文化を理解し、視野を広げ、新たな価値観を学ぶ。

3 交流予定校

- 立命館アジア太平洋大学

4 宿泊合宿までのスケジュール

- (1) 1月 説明会・生徒募集
- (2) 1月下旬 参加生徒決定
- (3) 2月24日（木）第1回事前研修
 - ・オリエンテーション
 - ・グループ決め
 - ・How to teach the words
 - ・Tour Planning of Nagano Pref.
- (4) 3月3日（木）第2回事前研修
 - ・Tour Planning of Naiagara Falls ・別府市リサーチ
- (5) 3月7日（月）第3回事前研修
 - ・別府市リサーチプレゼンテーション ・最終準備
- (6) 3月13日（日）出発
- (7) 3月14日（月）
 - ・立命館アジア太平洋大学にて、国際学生と交流
 - ・国際学生と別府市内フィールドワーク
- (8) 3月15日（火）
 - ・プレゼンテーション
- (9) 3月16日（水）帰着
- (10) 5月下旬 リーダー研修報告会



5 Global Study in Beppu 25名参加・職員3名引率

- (1) 全体会 学校紹介など
- (2) 模擬授業 立命館アジア太平洋大学にて模擬授業を受ける。
- (3) 別府市内フィールドワーク
 - グループごとに別府市の鉄輪地区へ国際学生とともに行き、外国人に紹介したい名所、レストランをピックアップする。観光地が外国人旅行者を取り込むために工夫していることを学ぶ。各グループで外国人向けの観光パンフレットを作る。
- (4) プレゼンテーション準備 国際学生と協力し、観光パンフレットを完成させる。

(5) プレゼンテーション

グループ毎に作成した観光パンフレットを見せながら、鉄輪地区の魅力、名所、アピールポイントなどを英語で発表。国際学生からフィードバックをもらう。

6 APU とのオンライン交流会・模擬授業 25名参加・職員3名参加

(1) 内容

新型コロナウイルス感染症の拡大により、別府市への訪問を中止。本校にて、オンラインで APU の国際学生と交流を行った。APU 淵之上教授の模擬講義にオンラインで参加した。

(2) オンライン交流

APU の国際学生と以下のようなプログラムで交流した。

1. 自己紹介
2. 学校紹介と長野市の紹介
APU の紹介と別府市の紹介
3. APU 学生への質問タイム
4. 長野高校生への質問タイム
5. 写真撮影

全て英語での交流になるため、開始前は非常に緊張した様子であったが、自己紹介をするうちに徐々に緊張が解け、楽しみながら会話をしていた。中には自分の言いたいことが英語で表現できないなど、もどかしさを感じる場面もあったようだった。

(3) 模擬講義

APU アジア太平洋学部 淵ノ上英樹教授より、『大学での「学び」』について講義を行っていただいた。1時間の中で、高校と大学での学びの違いや、大学選びについて、多様性についてお話を伺った。



・参加生徒の感想

☆オンラインが始まった時はすごく緊張して表情も返事もすごく固かったけど、時間が経っていくにつれてリラックスできて、最後は交流をすごく楽しめた。

☆留学生が1つの答えに対して Nice, Good, Perfect など何かしら反応をされていて、小さなことでも言葉にして反応することを次の機会に実践してみたいと思った。

☆意外と簡単な英語しか使わないなと感じた。相手が話していた単語で意味のわからないものももちろんあったが、自分が聞き取れた単語だけで交流はできた。わざと難しい単語を使わず自分達が知っている単語の中でどうやって相手に伝えるかが大事だと身をもって感じた。

☆とてもいい経験になりました。本当はやはりアメリカに行きたかったし、別府に行きたかったのですが、オンライン交流会がここまで有意義なものになるとは思いませんでした。本当にこの研修を企画、実施していただいたことに感謝します。

☆九州に行けないと分かった時はとても悲しかったです。高校に入る前からこの活動を知っていて、やっとそのメンバーになれた！と思ったら、中止になってしまったからです。でも、この活動に参加して皆と仲を深めたり、英語に対してもっと意欲的になれたり、成長したところもありました。これをきっかけに国際関係を学んでみたいと思うようになりました。応募する前は迷いもありましたが、リーダー研修のメンバーになれてよかったと心から思いました。そして今回現地に行けなかった分、2年の研修旅行での APU 訪問や大学生での留学を楽しみにしていきたいと思います！

4 グローカルな学び（外部との連携、生徒の主体的な活動、主なもの）

グ グローバルな学び 地協 地域との協働による学び

(1) オンライン学習会「次のパンデミックに備えたまちづくり」地協

5月10日（月） 倉根明德氏（信州地域デザインセンター コーディネーター）による。
参加生徒数 3年生7名。

海外の事例などをもとに、コロナに強いまちづくりとはというテーマで講演をいただき、質疑応答では、オンラインでインタビューをする経験を積むことができた。

(2) オンライン学習会「海外の人たちと協働する際に心がけること」グ 地協

5月10日（月） 中山将司氏（パナソニック株式会社）、西林祥平氏（パナソニック株式会社）、向井裕人氏（グライドパス株式会社代表取締役）、倉根明德氏による。

3年生7名が、（1）に引き続き参加。海外駐在や海外事業などを経験したからこそ、海外の人と協働する際の心構え、国際会議の進め方などについて実践的なお話を聞き、質疑応答を行った。

(3) 上田高校主催「令和3年度北陸新幹線サミット」（WWL 連携校として）グ 地協

6月12日（土） 3年生1名参加。「学生の幸福について」をテーマに発表。

(4) 大阪大学大学院国際公共政策研究科主催「Future Global Leaders Camp (FGLC) 2021 online」

グ

8月20日（金）～22日（日） 3年生1名参加。「ブラック進学校をなくそう」をテーマに発表。

(5) オンライン講演会「ザンビアの鉛汚染」グ 地協

9月8日（水） 講師：北海道大学博士研究員 中田北斗氏

校外との連携プログラム（Zoomを活用した教科等横断型授業）として、地歴公民科と総合学習で実施。オンラインであることを生かし、本校生徒だけでなく、飯山高等学校の生徒も参加できるように工夫し、他校と連携し学びの共有を図った。

(6) 長野青年会議所主催「NAGANO 高校生政策コンテスト 2021～きみのアイデアがまちを創る～」

地協

9月18日（土） 2年生1名が参加。若者の意見をまちへ届けるため、高校生が政策発表を行うコンテストで、事前審査を通過した7チームの高校生が自ら考えた政策アイデアを発表。「マッチングが繋ぎ、築く わがまちながの」を発表した本校生徒が、最優秀賞を受賞した。（会場参加者とオンライン視聴者合わせておよそ200人の投票により決定。）

(7) 長野県NPOセンター「ユースリーチ」との協働（主なもの）地協

2年生8名、1年生3名が参加。他校の生徒と連携して様々なプロジェクトに取り組み、地域での探究的な学びをリードしている。

- ・「信州環境フェア 2021 ～2050 ゼロカーボン実現に向けて～」8月20日（金）オンラインで実施。1年生3名が登壇し、ゼロカーボンについて長野県、長野市へ提言を行った。
- ・学生団体 Gomitomo：本校生徒が立ち上げたプラゴミ削減の取組をする団体。地域の若者や家族連れなどで、楽しくゴミ拾いをするイベント『清掃中』などを企画、運営。
- ・ACT、ドレスアップ、a lot of、篠ノ井未来プロジェクトなどの団体を長野高校生が立ち上げ、地域高校生の学びの場を創り出している。

・3日間のボランティア体験フィールドを提供する「地域まるごとキャンパス」にも参加し、長野環境団体大集合の運営などにも携わった。

(8) 神戸女学院大学主催「第12回絵本翻訳コンクール」グ

2年生1名が参加し、入賞候補ファイナリストとなった。

(9) 信州ベンチャーコンテスト実行委員会主催「信州ベンチャーコンテスト2021高校生部門」地協

11月13日(土) 2年生1名が参加。「match machi ～このマッチが、まちをつくる～」が公開最終審査に進む高校生部門ファイナリスト5名に選ばれた。

(10) 日本政策金融公庫主催「第9回高校生ビジネスプラン・グランプリ」

2年生1名が応募。

(11) 2学年九州研修旅行(連携協定校・立命館アジア太平洋大学に訪問)グ

11月23日(火)～26日(金)

研修旅行の柱として本校の連携協定校・立命館アジア太平洋大学(APU)における国際交流を企画。本校2年生全員が参加し、生徒8名に対してAPUの国際学生1～2名のグループを作り、交流を行った。台湾高雄市の高校と続けたオンライン交流について映像を使いながら説明したり、国際学生との英語でのディスカッションや会話を楽しんだ。また、模擬講義やキャンパス見学など、大学生活を体験する貴重な機会となった。



(12) ECC班 ディベート全国大会出場(オンライン)

12月18日(土)19日(日)「第16回全国高校生英語ディベート大会 online 大会(アカデミックディベート・準備型)」 2年生6名が参加し、全国19位入賞。(64校参加)

12月25日(土)26日(日)「第7回PDA高校生即興型英語ディベート全国大会(パラメンタリーディベート)」 2年生2名、1年生1名が参加し、全国第5位。(84校参加)

(13) 日本政策金融公庫主催「北関東・信越地区ビジネスプラン発表会」

2月19日(土) 2年生1名がオンライン参加。発表会は、若い世代に起業に興味をもってもらうと、全国の高校生などを対象にビジネスプランを募集した日本政策金融公庫が開いた。北関東や信越地域の10の高校の生徒たちがオンラインで参加する中で、本校生徒の発表した「公共施設マネジメント～廃れる街と膨れるインフラ負担～」が、プレゼンテーション能力や質疑応答への対応力などが高く評価され、ベストプレゼンテーション賞を受賞した。

(14) 金沢大学附属高等学校主催「高校生探究成果発表会」グ 地協

2月19日(土) 2年生1名がオンライン参加。「動物園における環境エンリッチメント」をテーマに、サイエンス部門の分科会で発表した。大学の先生などから研究の手法やまとめ方などアドバイスを多くもらい、今後の課題研究につながる良い機会となった。

Ⅲ 仮説3に係る実践（コンソーシアム等との連携事業・主なもの）

コンソーシアムと協働し、レイヤー的思考、ブレイクスルー発想、国際的な対話力を養成するカリキュラムを開発することで、生徒の探究的な学びの質が高まり、実効性の高い政策提言を可能にする。

長野県企画振興部 総合政策課	○フィールドワーク受入れ ※県庁その他の部署を含む
長野市企画政策部 企画課	○フィールドワーク受入れ ※市役所その他の部署を含む
長野県教育委員会 学びの改革支援課	○管理機関として事業全般の円滑な推進・指導・助言 ○人的支援（海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員、グローバル講師） ○パイロット校会議、「探究的な学び」研究会等の開催 ○運営指導委員会の開催
信州大学教育学部	○フィールドワーク受入れ ○課題研究コメント指導 ○1年課題研究中間発表会講師派遣（※発表会延期により派遣取りやめ）
信州大学工学部	○フィールドワーク受入れ ○課題研究発表会講師派遣
長野県立大学	○フィールドワーク受入れ ○課題研究発表会講師派遣 ○1年課題研究中間発表会講師派遣（※発表会延期により派遣取りやめ）
東京海上日動火災 保険株式会社 長野支店	○課題研究コメント指導 ○1年課題研究中間発表会講師派遣（※発表会延期により派遣取りやめ）
株式会社八十二銀 行	○課題研究コメント指導 ○1年課題研究中間発表会講師派遣（※発表会延期により派遣取りやめ）
長野青年会議所	○フィールドワーク受入れ
金鷄会（同窓会）	○教育設備改善のための委員会、基金管理 ○人材紹介スキル養成プログラム
連携協定校 APU 立命館アジア太 平洋大学	○国際会議への留学生参加 ○2年研修旅行受入れ ○1年米国リーダー研修代替（別府研修）受入れ

第3章

成果と評価、課題

I 実績の成果と評価

1 校内における成果の検証および評価の方法について

研究開発の成果と生徒、教員の意識の変容、および、生徒、保護者の事業に対する評価を見るために、以下のアンケートを実施した。

(1) 生徒対象

①NGPに係る意識調査：令和4年1月に、2年生281名（回答257名）、令和4年2月に1年生283名（回答265名）を対象に実施。質問項目と調査結果の全体像は、巻末の参考資料を参照。

*昨年度の同調査との比較を行っている。

②九州研修旅行についてのアンケート

令和3年12月に2年生281名（回答228名）を対象に実施。

(2) 保護者対象

保護者授業アンケート（令和4年2月実施）：全校生徒保護者のうち、468名より回答。

2 成果と評価

□以下の内容は、第1章所収の「令和3年度 事業研究開発完了報告書」を詳論するものである。

(1) SDGs 未来都市・学びの県にふさわしいグローバル人材育成について

【前年度報告書 課題1に関連して】

本事業が目指したSDGs未来都市NAGANOを実現するためのグローバルファシリテーターの育成であるが、事業最終年度に当たり、その目標は達成したと言える。

<評価> **エビデンス①** 「令和3年度1学年 NGP アンケート・意識調査」（令和4年2月実施）

- ・「相手と意見が違ったときにも冷静に相手の話に耳を傾けることができますか」に対して、「できる」「どちらかと言えばできる」と回答した1年生の割合
- ・「他人の話を聞くときに、自分なりの疑問や批判を持ちますか」に対して、「持つ」「どちらかといえば持つ」と回答した1年生の割合

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
相手と意見が違ったときにも冷静に相手の話に耳を傾けることができますか。	230(86.7%)	243(91.7%)
他人の話を聞くときに、自分なりの疑問や批判を持ちますか。	223(84.1%)	231(87.5%)

<評価> **エビデンス②** 「令和3年度2学年 NGP アンケート・意識調査」（令和4年1月実施）

- ・「相手と意見が違ったときにも冷静に相手の話に耳を傾けることができますか」に対して、「できる」「どちらかと言えばできる」と回答した2年生の割合
- ・「他人の話を聞くときに、自分なりの疑問や批判を持ちますか」に対して、「持つ」「どちらかといえば持つ」と回答した2年生の割合

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
相手と意見が違ったときにも冷静に相手の話に耳を傾けることができますか。	207(83.5%)	231(89.9%)
他人の話を聞くときに、自分なりの疑問や批判を持ちますか。	183(74.7%)	224(87.1%)

☆エビデンス①は同じ2つの質問に対する、1年生の昨年度との比較、エビデンス②も同様に、2年生の昨年度との比較である。SGHの時代から続く新しい学びの成果で、生徒が自分の視点を持ちながらも、他者の多様な意見や価値観を取り入れ、物事を解決する力が養われていると考えられる。なお、アンケートの自由記述にも、2年生の中に「2年次はランダムな班構成（※プロジェクト発表会の発表グループ編成のこと）となったため、自分とは全く違う視点を持った人と考えを共有することができたので自分のプレゼン作成の際などに役立った。」と回答する生徒もおり、他者との協働から新たな視点を得て、それを探究的な学びや課題解決に結びつけた例と言える。

<評価> **エビデンス③** 「令和3年度2学年 NGP アンケート・意識調査」（令和4年1月実施）

- ①「自らの情報収集を通じて、課題研究を深めることができた」に対して「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した2年生の割合
- ②「学習していることが、身の回りの課題や社会課題の解決に結びつくかどうかを考えたことがありますか」に対して「ある」「どちらかといえばある」と回答した2年生の割合
- ③「今年度のNGP活動はあなたにとって有意義でしたか」に対して、「有意義」「ほぼ有意義」と回答した2年生の割合

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
①自らの情報収集を通じて、課題研究を深めることができた。	143(57.0%)	236(92.2%)
②学習していることが、身の回りの課題や社会課題の解決に結びつくかどうかを考えたことがありますか。	136(54.9%)	187(73.4%)
③今年度のNGP活動はあなたにとって有意義でしたか。	131(53.0%)	212(82.8%)

☆①及び②における昨年度と今年度の比較から、本事業の活動を通して、生徒の課題探究や課題解決に対する意欲が高まったと考えられる。探究的な学びに粘り強く取り組む力は、「グローバルファシリテーター」に必要な資質・能力のひとつと考えられるが、①及び②の数値の上昇から、本事業のカリキュラム開発がファシリテーター育成に大きく寄与したと言える。また、③で見られるように、全体としての満足感についての値も大きく上昇した。本校では、2年生後半に主体性や意欲が低下する傾向が見られていた上に、昨年度からコロナウイルス感染拡大に伴い、海外研修が行えないなど、従来の事業内容は変更や中止を余儀なくされた。しかし、オンラインの活用や、2年次の台湾研修旅行を九州への代替研

修に切り替えて実地研修ができたことなどから、「有意義」だと感じる生徒が大幅に増えた。感染防止対策を行いながら、従前に近い形で各活動ができた点が影響していると考えられる。

<評価> **エビデンス④** 「令和3年度学校評価アンケート」（令和4年2月実施）

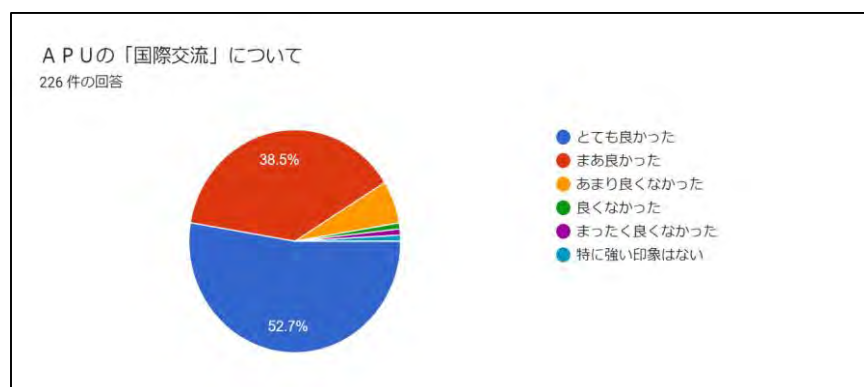
- ・「SGH 事業5年間の実績の上に、グローバル・ローカルの二つの視点を身につけたグローバル人材を育成するためのカリキュラムの開発に努めている」のうち、「十分達成」「概ね達成」と回答した保護者の割合
- ・「外部の諸機関や多様な人々と連携して課題研究の充実を図り、地域の課題解決につなげる取り組みをしている」のうち、「十分達成」「概ね達成」と回答した保護者の割合

質問	今年度人数 (割合)
SGH 事業5年間の実績の上に、グローバル・ローカルの二つの視点を身につけたグローバル人材を育成するためのカリキュラムの開発に努めている。	389 (83.1%)
外部の諸機関や多様な人々と連携して課題研究の充実を図り、地域の課題解決につなげる取り組みをしている。	336 (71.7%)

☆上記の2項目の「グローバル人材の育成」に関する質問において、保護者から達成しているとの評価が7割以上となった。コロナウイルス感染拡大を受け、公開授業や課題研究発表会などの保護者への公開が困難なものもあったが、本事業においては、3年NGP 選択生による『国際会議グローバルアカデミア2021 (SDGs 地方創生会議)』で、国内外の参加者をオンラインでつないだ当日の会議を、YouTube Liveを活用することで限定配信した。また、学校 HP 上でのブログの発信を通し、事業内容を周知することで保護者の本事業への理解が深まったと考えられる。

(2) グローバルな視点でのキャリア観の育成に関連して【前年度報告書 課題2に関連して】

<評価> **エビデンス⑤** 九州研修旅行についてのアンケート（令和3年12月実施）
「APU との交流を振り返ってどうでしたか」



228 件の回答のうち、
「とても良かった」 116 件 (52.7%)
「良かった」 157 件 (38.5%)
満足度が高い生徒が圧倒的多数

☆エビデンス③でも述べたように、海外研修などが中止となる中で、九州への代替研修に切り替え、本校の連携協定校・立命館アジア太平洋大学 (APU) における国際交流がメインとなる研修旅行を組み立てた。コロナ禍において軒並みオンラインとなった国際交流や海外プログラムだったが、生徒にとっては、初めて対面で国際交流ができたことも、高い満足度を得た背景だと考えられる。加えて、台湾・高雄市

7校とのオンライン交流を通して、国際交流の楽しさを体験していたことや、ファシリテーションや英語ディスカッションなど交流するためのスキルを繰り返し学んだことも、グローバル社会で必要とされる能力の育成において、一定の役割を果たしたと考えられる。

<評価> **エビデンス⑥** 「令和3年度2学年 NGP アンケート・意識調査」（令和4年1月実施）

- ・「（活動全般を通して）自分と違う考えや習慣、文化を持った人と接することは楽しいと思いますか」に対して、「思う」「どちらかと言えば思う」と回答した2年生の人数と割合。
- ・「（活動全般を通して）将来、国際的な規模での仕事や研究をしたいと思いますか」に対して、「思う」「どちらかと言えば思う」と回答した2年生の人数と割合。

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
自分と違う考えや習慣、文化を持った人と接することは楽しいと思いますか。	181(73.3%)	223(87.4%)
将来、国際的な規模での仕事や研究をしたいと思いますか。	115(46.5%)	131(50.9%)

☆国際交流(台湾・高雄市、立命館アジア太平洋大学)の取り組みを、形式を変更しながら今年度も継続して行えたことは、英語のスキル向上だけではなく、互いの文化や習慣の壁を越え、相互理解を深めることにつながり、生徒たちの意欲を高める機会となった。国際交流の楽しさを感じ、さらに将来、国際的な規模の仕事や研究を希望する生徒が増加したことは、自身の卒業後のキャリア形成に資する企画となったと考えられる。

(3) 個別最適な学びへの対応について【前年度報告書 課題3に関連して】

<評価> **エビデンス⑦** 「令和3年度2学年 NGP アンケート・意識調査」（令和4年1月実施）

- ・「独自の視点やアイデアを見つける手法が身についてきた」に対して、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した2年生の人数と割合。
- ・「研究開始当初、自分が思いつかなかったような提案を行うことができた」に対して、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した2年生の人数と割合。

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
独自の視点やアイデアを見つける手法が身についてきた。	140(56.4%)	166(64.6%)
研究開始当初、自分が思いつかなかったような提案を行うことができた。	138(55.9%)	156(60.7%)

☆個別最適な学びが進んだのは、2年生の課題研究が昨年度から個人研究化されたことが考えられる。特に今年度の2年生は、フィールドワーク先が昨年度の85ヶ所から168ヶ所と大幅に増えたことから分かるように、より個人研究化が進み、個別最適な学びの促進を後押しした。また、今年度から1・2年生に1人1台タブレット端末が配布されたことも大きく影響したと言える。なお、2年生の課題研究が個人研究化されたことについて、アンケートの自由記述で「課題設定の自由度が高いだけに何を調べようかかなり迷った。しかし、それが逆に、自身のリサーチ力や課題を見つける力の成長に繋がったと

考えている。」 「2年間を通して新しい分野に興味を持てた。(中略)2年では、1年に研究した心理とは全くつながらない、地域に目を向け新たな課題研究を試みました。新たなことに目を向けたことで、また新たな視点も見つかりとても充実した発表になった。」などと回答した生徒もあり、個人研究については生徒から一定の評価を得ている。

<評価> **エビデンス⑧** 「令和3年度2学年 NGP アンケート・意識調査」(令和4年1月実施)

- ・「現在取り組んでいる課題研究の分野あるいはテーマに関連する学部・学科への進学を考えていますか」に対して、「考えている」「どちらかと言えば考えている」と回答した2年生の人数と割合。

質問	昨年度人数 (割合)	今年度人数 (割合)
現在取り組んでいる課題研究の分野あるいはテーマに関連する学部・学科への進学を考えていますか。	55(22.2%)	126(49.3%)

☆個別最適な学びが進んだ結果、本事業において、生徒が設定した課題研究のテーマと生徒の進路希望が合致し、上記の項目について昨年度に比べ数値が大幅に増加した。なお、アンケートの自由記述にも、「自分の研究したいことを自分の将来を考えて選ぶとより深い研究になるし、興味もあるからより有意義なものとなると思った。研究を続ける中ですごく深い部分まで知ることができた。」「NGP 活動は大学の学部選択だけでなく、自分の将来の夢を考えるきっかけとなったのでとても充実した時間だった。」などの回答もあり、自身の進路やキャリアに関するテーマを深く研究していくことは、生徒たちの研究意欲の高まりにもつながっている。研究の質のさらなる向上が今後の課題である。

Ⅱ 運営指導委員会による評価

第1回 運営指導委員会

- 1 日時 令和3年(2021年)8月26日(木)15:00-16:30
- 2 会場 オンライン
- 3 出席者 (敬称略)
 - 委員長 中村 正行(信州大学工学部教授)
 - 委員 久世 良三(株式会社サンクゼール代表取締役会長)
 - 清水唯一朗(慶應義塾大学総合政策学部教授)
 - 中川 美紀(ビジネスアナリスト/ソフトインテリジェンス塾代表)
 - 指定校 宮本 隆(長野高等学校長)
 - 内藤 信一(長野高等学校教頭)
 - 海沼 孝典(研究開発主任)
 - 管理機関 廣田 昌彦(長野県教育委員会学びの改革支援課教育幹兼高校教育指導係長)
 - 帯川 有美(長野県教育委員会学びの改革支援課指導主事)

4 内容

(1) 開会行事:

- ① 教育委員会あいさつ
- ② 運営指導委員紹介
- ③ 出席者紹介
- ④ 正副委員長選出、正副委員長あいさつ
- ⑤ 長野高等学校長あいさつ

(2) 議題Ⅰ「昨年度の事業報告(成果と課題)及び4月からの事業報告」

長野高校より説明(海沼主任)

① 昨年度の事業報告(成果と課題)

今年度重点項目 昨年度の課題より設定

- ア 成果の検証・普及 課題研究による提言から具体的な行動へ
 - 例) 清掃活動を大学後も継続 外部団体ユースリーチでの活動
 - 生徒の進路希望と連携した取り組みの強化
 - グループ研究から個別研究化 →卒業後の進路希望をより意識した内容
- イ 地域との協働による政策提言づくり
 - コンソーシアムとの連携継続・深化 次年度以降の協力体制の継続
- ウ 終了後の自走 個別研究の指導法の改善
 - 生徒間(他学年間)の連携による探究活動の継承 上級生へのインタビュー

② 4月からの事業報告

- ア International Anime Talk (オンライン) 3月 28名参加
 - 米国リーダー研修プログラムの代替企画 日本語発表をサポート

海外ネットワークの構築

- イ ICT活用 1、2年生全員にタブレット配布 発信力強化
ロイロノートの活用 例) 夏休み中の課題で朝日新聞データ検索を利用
- ウ グローカルアカデミア (オンライン) 5月 APU・東京大・早稲田大他参加
英語によるグループディスカッション 会議メンバー等生徒が自分たちで企画
- エ 3学年文化祭での発表 2学年フィールドワーク(対面とオンライン併用)
生徒の個別研究先が増加(オンライン含む)
生徒 NGP 選択者の自主的な活動 例) フードドライブ活動

中村委員長 ロイロノートはどのようなアプリか。費用については有料か。

教務主任 双方向のやり取りができるツールであり、動画画像のやり取り、文書の書き込みなど簡単にできる。今年度は無料であり、活動報告をすることになっている。来年度からは有料であるが、それほど高価ではない。

中村委員長 使いこなしていくには費用の面が心配になることがある。

久世委員 2年間パンデミックの中、意欲的な取組にご苦労を感じる。パンデミックを踏まえた ICT の利用やアニメトークなど、限られた状況下で時代にあった取組の模索から方向性が見えたのかなと感じている。

清水委員 大変な中、工夫を凝らした活動に敬意を表したい。昨年からの課題だった ICT ネットワークの条件も整い素晴らしい。現在、小学生でもロイロノートをパワポで普通に使いこなしている。何年かすると、これを普通に使ってきた子供たちに、高校でどこまで対応できるか、簡単に情報は集まるがそれを探究につなげる本質的な力が問われると思う。問題点から自分の考えをどう発展させるかが、情報があふれることで難しくなっている。探究の難しさを感じ、小中高全体の課題と感じる。

次に、アニメトークで日本語のサポートをしたことは非常に面白い取組であると感じた。ある学会(ヨーロッパ日本研究学会)ではヨーロッパにいる日本研究者が3年に1度集まるが、共通言語は英語と日本語である。まさに、互いの言語をサポートし合うことで日本におけるスーパーグローバルと感じる。私の勤務先でも現在、力を入れているのは日本語教師の育成である。以前、標識をユニバーサルにしていく研究をした生徒がいたが、長野にいる外国人ともっとコミュニケーションをとっていくという方向に広がると面白いと思う。

また、ipadを使うことで、メディアリテラシーも重要になってくる。海外とのスーパーグローバルの話になると、情報とどう向き合うかが探究の入り口となる。黒人差別のようなネガティブな情報に向き合ったり、ファクトチェックの必要性は大切である。メディアリテラシーの講義などを受けることもよいだろう。

上級生へのインタビューなど上下の交流は素晴らしいが、体験した生徒だけにとどめず、学内で共有するだけでなく同じような活動をする生徒間でもシェアしていくとよいと思う。

校長先生から SSH への参加の話があったが、SSH と SGH のそれぞれの遺産、問題見能力と自走する能力を組み合わせる必要があると感じる。

中川委員 様々な制約の中、学びを深めているプロジェクトが素晴らしいという印象である。試行錯誤しながら、オンラインを通じた学びと対面という両方を体験して大きな収穫を得られたことを資料から感じた。2年生のフィールドワーク先が85件から168件に増えたこととオンラインのみでなく対面で行っていることに驚いた。今後も ICT 化は避けられないが、それを十分活用して学びにつなげていってほしい。探究活動を深めるにあたって対面により五感で感じる体験

は大事だが、制約の中でできたときの価値が一層感じられるのではないかと思う。フードドライブなど自分事にとらえて自主的に動いていけることが素晴らしいと感じた。

中村委員長 私も先生方のご苦勞を感じている。以前数学の授業を参観させていただいたが、ipad を使い先生方も大変そうであった。生徒はデジタルネイティブになりつつあるが、どう活用していくか、教育効果をあげていくために、教諭側の研修や校内での協働が必要である。清水委員も話された、英語日本語のサポートについては、最近は翻訳ツールも精度が上がってきており、多言語でのコミュニケーションが容易になり、今後は内容が重要になってくる。

さきほど中川委員からもあったが、対面とオンライン併用といったハイブリッド型が重要であると思う。ハイブリッド車の自動車・モーターのように、役割が分かれているが融合し燃費が上がる、英語と日本語の併用もそういうことだと感じる。

校長先生から SSH への挑戦のお話があったが、文理融合は本来分かれたものでなくグローバルに活躍するには両方を鍛えていく必要がある。文理融合、オンラインと対面、日本語と英語がうまく融合した形でシステムが構築できればハイブリッド車のような効率のよいものが出ていくと思う。是非 SSH を進めてほしい。生徒たちはその下地を十分この活動で力を蓄えている。

(3) 議題Ⅱ「今後の事業計画について」 長野高校より説明（海沼主任）

コンソーシアム 教科との連携 主体性の育成と学びの土壌づくりを目指す

① 2 学年 台湾とのオンライン交流 立命館アジア太平洋大学 (APU)

課題研究 個人研究先の増加によりフィールドワークの支援体制

職員・コンソーシアムの方が支援 「伴走者」として協力・サポート

② 1 学年 研究テーマを考える グループワーク

11/29 フィールドワーク予定 インタビュースキル養成 2月発表会

中村委員長 オンライン化になることで支障はあるか。昨年度の活動からオンラインになるものはあるか。

海沼主任 昨年度のノウハウがあるので、支障がないわけではないが工夫したい。

中村委員長 現在は分散登校か。

宮本校長 8月いっぱい時間差登校やオンライン併用など、県の指示のもと学校によって異なる。

中村委員長 先生方が本当に大変だと思う。

久世委員 文理融合に挑戦するとお聞きし素晴らしいと感じた。ハイブリッド化、多言語化ツールをうまく使っていきたい。リアルとオンラインの融合は、企業人の私もキーワードとして行動しており、勉強になった。自信をもって新しいことに挑戦してほしいと期待する。

清水委員 2点コメントしたい。上下、縦横のつながりを大事にしてほしい。推薦が決まった生徒は時間ができる。お互いが発表の場に出向いたり、コンソーシアムの方に発表会に来ていただきコメントをいただくとよいと思う。思いもよらない場面での可能性が広がることもある。

2点目は、リモートでのフィールドワークを行い、Zoomで1対1で行うことでハラスメントが増えることがある。事前に起こらないようにすることも大事だが、起こった場合の対処を生徒に伝えておくことが大事である。

中川委員 2点述べさせていただく。限られた時間や資源の中でいかに効果的に学びを深めるか、学びの重点化、精選化をはかることが重要になる。先生方の経験や工夫された知見などを活かして進めていただきたい。

2点目に SDGs や多様性の流れの価値観は広がっており、その中でのリーダー像や人材育成が

求められる。グローバルファシリテーターの育成が今後求められるが、チームやグループの関わりで多様性を受け入れることは大切である一方で、無限に価値が存在し拡散しがちになる。全てを受け入れていくのではなく、大事な軸や方向性を持ったファシリテーターが多様性の時代のリーダー像だと感じる。長野の目指すグローバル人材としての難しさや楽しさ、奥深さを味わえる体験ができるとよいと期待している。

中村委員長 最近私もオンライン学会に並行参加することがよくある。個別研究を全員が発表するようにして、セッションを並行してできるようなものにし、企業の皆さんにも参加していただくシンポジウムのようなものができたらいいと思う。

(4) 閉会行事：諸連絡

第2回 運営指導委員会

- | | | |
|---|------|-------------------------------------|
| 1 | 日時 | 令和4年(2022年)2月3日(木) 15:00-16:30 |
| 2 | 会場 | オンライン |
| 3 | 出席者 | (敬称略) |
| | 委員長 | 中村 正行(信州大学工学部教授) |
| | 副委員長 | 山口 利幸(元長野県教育長) |
| | 委員 | 清水唯一朗(慶應義塾大学総合政策学部教授) |
| | | 中川 美紀(ビジネスアナリスト/ソフトインテリジェンス塾代表) |
| | 指定校 | 宮本 隆(長野高等学校長) |
| | | 内藤 信一(長野高等学校教頭) |
| | | 海沼 孝典(研究開発主任) |
| | 管理機関 | 廣田 昌彦(長野県教育委員会学びの改革支援課教育幹兼高校教育指導係長) |
| | | 帯川 有美(長野県教育委員会学びの改革支援課指導主事) |

4 内容

(1) 開会行事：

- ① 教育委員会あいさつ
- ② 出席者紹介
- ③ 正副委員長選出、正副委員長あいさつ
- ④ 長野高等学校長あいさつ

(2) 議題Ⅰ「今年度の事業報告について」

長野高校より説明(海沼主任)

- ① 生徒発表 2年生課題研究発表会 優良賞受賞「都市緑化の展望」 2学年 黒岩 凜
- ② 令和3年度 of 事業報告(9月～3月)
 - ア 2年生台湾交流(10月～11月) 台湾研修旅行の代替行事
オンラインプロジェクト テーマ Video Exchange 2回のグループ毎の交流
 - イ 2年生立命館アジア太平洋大学(APU) 台湾研修旅行の代替旅行
国際学生との国際交流 英語の模擬講義受講
 - ウ 2年生課題研究発表会 14分散会でプロジェクト発表会 選抜代表者の発表会
 - エ 1年生インタビュー実践(オンライン)

オ 1年生フィールドワーク（対面とオンライン）

カ 希望者による APU 研修 米国リーダー研修の代替行事

国際学生と研究課題について別府市内フィールドワーク グループ発表

③ 3年間の成果（SGHから続く新しい学びの成果）

ア グローカルファシリテーターの育成という目標は達成

ローカルとグローバルの視点の融合 国際交流やグループ活動により多様な価値観の共有が見られた。

イ 生徒が主体的に学ぶ意欲の向上

ウ 生徒の発信力の向上 生徒が自ら実践し、教員が傍観する姿が増えた。

エ 個別最適な学びへの対応 ICT 機器、一人一台端末の導入により、加速的に効果が見られた。

オ 新しい学びのネットワーク（地域、海外）の構築 生徒自らが生涯続くネットワークを拡大した。

山口委員 グループではなく個人で課題テーマを設定するようになって2年目ということだが、探究的な視点から個別研究の方が良いと判断したのか、それともコロナ感染拡大の影響があったのか。

海沼主任 昨年度から2年生は個別研究としている。コロナ禍だからという理由ではなく、生徒が研究したいテーマをとことん研究することで一人ひとりの意欲が高まり、グループ研究を経て生徒の中でもっとやってみたいことが生まれてきた。生徒からは個別研究を肯定的にとらえる意見が多かった。

清水委員 横並びの競争、自分たちの仲間の学びと比べて、もっと自分が頑張らないというような競争心が個人の研究で深まり、とても面白いと感じた。グループ研究の良さもあるが、私の経験でも、個別研究により俄然出来が見違える。グループで依存心をもってなんとなくやっているのでは違ってくるので、グループから個人研究への流れが良いと改めて感じた。一方で、先生方の負担が大きくなる問題も生じてくるが、最近では先生方の中にも探究活動への理解が浸透ってきて、生徒も自立的になってきていると感じている。

グローバル、英語という点では、APU（立命館アジア太平洋大学）を見出したのが良い。ネイティブに対しては引け目を感じてしまう場合があるが、台湾や APU との交流では、彼ら自身が ESL（English Second Language）で「交流するための英語」を使っている点が良い。台湾においては、「日本語を教える」という点も加わるので、長野高校の取組がこれからのグローバルの先駆となっていると感じた。

中川委員 生徒たちが、関心のあるテーマに、五感を通して、教科を横断し多面的に追究をすることで、今までと違った世界が見えてきていることがわかった。生徒たちが広く深く知ろうとするだけでなく、外に伝えようとしたり、さらに実際に行動に移していることがアンケートからわかり、素晴らしいと感じた。

特に素晴らしい成果と思ったのは、「当事者意識の芽生え」である。今まで、遠いことと感じていた社会課題のテーマを、自分が考えて動き出さなければいけない「自分ごと」として切実感をもって捉えられるようになってきている。私自身が企業の人材育成に関わる中で、「当事者意識をどう持てるか」は、社会や企業で求められている資質であると痛感している。主体的に学ぶ意欲が探究のスタートであり、情報収集力や分析力、コミュニケーション力、行動力は自ずと高まると感じる。

山口委員 生徒が学びの主体性を自覚しつつあるという印象を強く持った。勉強の必要性を偏差値で捉

えるのではなく、生徒たちが学びの主体性を取り戻し、自覚し体験したところが大きい。一人ひとりが他人と学びを通じて自分の視点が豊富になったり、自分の至らなさが見えることは大切な経験であり、生涯に繋がってほしい。

生徒の感想はよくわかったが、それに携わった先生方の感想も是非資料に載せてほしい。大きなプロジェクトの係の先生方は大変であったと推察でき、学校内での反発や説得を重ねたことと思う。激論を交わした経験や苦難を乗り越えたことなど、是非記録に残してもらえると長野高校の実践は長野県全体の実践に役立つと思う。

中村委員長 私も、成果だけでなく先生方の様々な経験の記録を残すことは、全県の参考になると感じるので、是非そうしてもらいたい。

一番感じたことは、さきほど生徒の発表を見て、一人で調べ上げまとめあげて表現する力が備わってきていることがわかったが、これから先、特にものづくりではグループ研究が欠かせない。大学の学生が企業と共同研究をすると、企業からの課題は速度が要求される。長野高校の生徒たちがどのような役割をするかを見てみたい。県内の企業との共同プロジェクトのようなものを立ち上げてもらえると嬉しい。

(3) 議題Ⅱ「事業終了後の取組について」

長野高校より説明（海沼主任）

① 事業終了後の活動

ア NGP 活動は維持、発展

イ 本校と校外（コンソーシアム、学びのネットワーク）の連携継続を依頼

② 課題研究のさらなる充実

ア SDGs 関連だけでなく、進路希望に関連させて課題を設定

イ SSH の導入 令和5年度開始に向けて準備

ウ 課題研究指導体制の構築 個別研究先増加に伴う教員の負担増に対する支援体制を研究

エ 政策提言に終わらない活動へ

③ 国際交流の継続

ア 継続的な国際交流の推進

イ 海外プログラムの充実 立命館アジア太平洋大学（APU）との交流事業

ウ WWL との連携

④ その他

ア 地域への成果の還元

イ 個別最適な学びのさらなる充実 ICT 機器の効果的な活用方法の研究など

ウ 生徒間での学びの交流の促進 学年を越えたテーマの研究など

山口委員 さきほど教員側の検証についての話をしたが、課題探究型学習に取り組んだ結果、従来の授業形態からどう変わったか、どのように変えていくべきだと先生方が思われているか知りたい。生徒から高い要求が望まれることがあるかと思う。

また、研究テーマに絡んで、部活に絡めて考える提案をしたい。同一テーマを深めるよう、探究活動と部活動とのコラボがあつて良いと思う。大学や、若者の発想と提携したい企業と、研究を持続的に繋げてもらえるよう期待する。

清水委員 私も、部活との関係を提言したい。私の大学でも、自治会の農業サークルの活動例で、地元とキャンパスがつながり、キャンパスから地元の人たちがグローバルにつながり、知や人の連環ができています。そのような部活動に資金援助があると良い。

ここ数年でインターネット整備が進み、個別の学びがネットワークを通じてできるようになったので、次はアナログの「人の繋がり」の担保が重要である。

そこで是非、卒業生を活用してほしい。SGH や NGP の卒業生 8 学年の学生たちを活用したらどうか。部活動の先輩や、外に広がる大学生、大学院生たちと繋がり続けることがリーズナブルではないか。高校に愛着を持っている卒業生という財産を大事にし、彼らにも活動の場所を与えることで、いい形で循環していくと思う。

中川委員 今回の 8 年間の成果を土台に、今後も長野高校流の探究を深めてほしい。先生方の労力は大変かと思うが、進化発展させてほしい。

課題研究については、今後、各生徒の進路に応じて興味を結び付けるとお聞きし、進化の形であると感じた。自分として主体的になれるか、当事者意識を持てるか、はテーマ設定が重要であり、期待したい。

また、日ごろの先生方の関わりが大切になると感じる。生徒のアンケートによると、自分がどう関わるか、どう生きていくかが大切だということが刻まれたように思う。それらは、答えのない時代のリーダーとなる際に素地となり、将来に繋がる。課題研究の意義や思いを、日々のはたきかけの中で導いていただきたい。

私も、清水委員の話にあったように、卒業生との交流に期待したい。特に年齢が離れていない方たちをモデルにし、交流を進めていただきたい。

中村委員長 今後 SSH を検討中とのことだが、いつからか。

宮本校長先生 令和 4 年に申請を進め、5 年度導入の予定で進めたい。

中村委員長 理系にも力を入れていただきたく是非お願いしたい。多様な学び、探究も若いころからやらないといけない。STEAM 教育のようなものが必要である。政策提言に終わってしまうという話があったが、さきほどの生徒の発表からもすでに行動に移している部分が見られた。実践的な面で、成果として出てきていると感じている。

(4) 閉会行事：

- ① 教育委員会あいさつ
- ② 長野高等学校長あいさつ

課題研究について

【自分自身の取り組みについて】

Q2 友達と協力しながら、自ら積極的に活動できたか。

	人数	%		
① 出来た	139	52.5%		
② ほぼ出来た	101	38.1%		
③ どちらとも言えない	20	7.5%		
④ あまり出来なかった	3	1.1%		
⑤ 出来なかった	2	0.8%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q3 活動内容の指示が明確で分かったりやすかったですか。

	人数	%		
① 良い	95	35.8%		
② ほぼ良い	130	49.1%		
③ どちらとも言えない	34	12.8%		
④ あまり良くない	5	1.9%		
⑤ 良くない	1	0.4%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q5 全体として良い授業でしたか。

	人数	%		
① 良い	99	37.5%		
② ほぼ良い	120	45.5%		
③ どちらとも言えない	37	14.0%		
④ あまり良くない	5	1.9%		
⑤ 良くない	3	1.1%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

活動全般を通して

【自分自身の取り組みについてあてはまるものを選んでください。】

Q6 議論や分析を通じて、理解を深めることを体験した。

	人数	%		
① 当てはまる	104	39.5%		
② やや当てはまる	126	47.9%		
③ どちらとも言えない	23	8.7%		
④ あまり当てはまらない	6	2.3%		
⑤ 当てはまらない	4	1.5%		
合計	263			
①	②	③	④	⑤

Q7 研究開始当初、自分が思いつかなかったような提案を行うことができた。

	人数	%		
① 当てはまる	74	28.2%		
② やや当てはまる	88	33.6%		
③ どちらとも言えない	67	25.6%		
④ あまり当てはまらない	24	9.2%		
⑤ 当てはまらない	9	3.4%		
合計	262			
①	②	③	④	⑤

Q8 独自の視点やアイデアを見つける手法が身についた。

	人数	%		
① 当てはまる	47	17.8%		
② やや当てはまる	115	43.6%		
③ どちらとも言えない	74	28.0%		
④ あまり当てはまらない	21	8.0%		
⑤ 当てはまらない	7	2.7%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q9 学校外での対話(国内・社会人や大学生を想定)することに慣れた。

	人数	%		
① 当てはまる	76	28.8%		
② やや当てはまる	107	40.5%		
③ どちらとも言えない	49	18.6%		
④ あまり当てはまらない	24	9.1%		
⑤ 当てはまらない	8	3.0%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

情報収集能力・活用能力・発信能力について

【自分自身の取り組みについてあてはまるものを選んでください。】

Q10 自らの情報収集を通じて、課題研究を深めることができた。

	人数	%		
① 当てはまる	120	45.5%		
② やや当てはまる	114	43.2%		
③ どちらとも言えない	23	8.7%		
④ あまり当てはまらない	5	1.9%		
⑤ 当てはまらない	2	0.8%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q11 課題研究や探究学習における情報収集能力が高められた。

	人数	%		
① 当てはまる	81	30.7%		
② やや当てはまる	144	54.5%		
③ どちらとも言えない	25	9.5%		
④ あまり当てはまらない	11	4.2%		
⑤ 当てはまらない	3	1.1%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q12 プレゼン作成時に、持っている情報の意味(現状説明、理由付け、具体例等)を考える。

	人数	%		
① 当てはまる	104	39.7%		
② やや当てはまる	117	44.7%		
③ どちらとも言えない	34	13.0%		
④ あまり当てはまらない	7	2.7%		
⑤ 当てはまらない	0	0%		
合計	262			
①	②	③	④	⑤

NGP全体について

Q15 今年度のNGPの活動は、あなたにとって有意義でしたか。

	人数	%		
① 有意義	95	35.8%		
② ほぼ有意義	121	45.7%		
③ どちらとも言えない	29	10.9%		
④ あまり有意義がない	15	5.7%		
⑤ 有意義がない	5	1.9%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q19 外国に行ったことはありますか。

	人数	%		
① 暮らしたことがある	7	2.7%		
② 4回以上ある	15	5.7%		
③ 2~3回ある	19	7.2%		
④ 1回ある	44	16.7%		
⑤ ない	178	67.7%		
合計	263			
①	②	③	④	⑤

Q20 本校在学中に自主的な留学や海外研修(3月の米国リーダー研修を含む)が2年次台湾研修は含まない)に行きたいと思いませんか

	人数	%		
① 思う	51	19.2%		
② どちらかと言えば思う	59	22.3%		
③ どちらとも言えない	42	15.8%		
④ あまり思わない	56	21.1%		
⑤ 思わない	57	21.5%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q21 本校在学中にビジネス課題やグローバルな社会課題に関する大会(JICA「国際協力エッセイコンテスト」)「唐州グローバル・ヘルセミナー」、「全国高校生金融経済クイズ選手権(エコミクス甲子園)」などに参加または応募してみたいと思いませんか。

	人数	%		
① 思う	24	9.1%		
② どちらかと言えば思う	44	16.6%		
③ どちらとも言えない	57	21.5%		
④ あまり思わない	70	26.4%		
⑤ 思わない	70	26.4%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q22 大学に進学したら留学や海外研修をしたいと思いませんか。

	人数	%		
① 思う	86	32.5%		
② どちらかと言えば思う	64	24.2%		
③ どちらとも言えない	46	17.4%		
④ あまり思わない	38	14.3%		
⑤ 思わない	31	11.7%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q23 将来、国際的な規模での仕事や研究をしたいと思いませんか。

	人数	%		
① 思う	64	24.2%		
② どちらかと言えば思う	67	25.3%		
③ どちらとも言えない	69	26.0%		
④ あまり思わない	41	15.5%		
⑤ 思わない	24	9.1%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q24 世界や身近な地域の動きについて情報を得たり学んだりすることに関心がありますか。

	人数	%		
① とてもある	64	24.3%		
② ある	136	51.7%		
③ どちらとも言えない	49	18.6%		
④ あまりない	10	3.8%		
⑤ ない	4	1.5%		
合計	263			
①	②	③	④	⑤

Q25 外国の人に日本や最野の伝統文化について説明を求められた場合、何か説明できると思いませんか(日本語でよい)。

	人数	%		
① 思う	73	27.5%		
② どちらかと言えば思う	118	44.5%		
③ どちらとも言えない	47	17.7%		
④ あまり思わない	22	8.3%		
⑤ 思わない	5	1.9%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q26 国際化に重点を置く大学への進学を考えていますか。

	人数	%		
① 考えている	22	8.3%		
② どちらかと言えば考えている	48	18.1%		
③ どちらとも言えない	79	29.8%		
④ あまり考えていない	78	29.4%		
⑤ 考えていない	38	14.3%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q27 海外の大学への進学を考えていますか。

	人数	%		
① 考えている	4	1.5%		
② どちらかと言えば考えている	8	3.0%		
③ どちらとも言えない	32	12.1%		
④ あまり考えていない	68	25.8%		
⑤ 考えていない	152	57.6%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q28 現在取り組んでいる課題研究の分野あるいはテーマに関連する学部・学科への進学を考えていますか。

	人数	%		
① 考えている	19	7.2%		
② どちらかと言えば考えている	36	13.6%		
③ どちらとも言えない	57	21.6%		
④ あまり考えていない	70	26.5%		
⑤ 考えていない	82	31.1%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q29 学校での自主的な社会貢献活動(ハロー・アローン、生徒会募金、災害等の寄付、地域行事、ボランティア活動)や自己研鑽活動(金鶏会館サイエンスカフェ、H-LAB、地域やJICA・大学が主催する講演会・研修会、社会体育への参加)をしていますか。

	人数	%		
① している	11	4.2%		
② どちらかと言えばしている	28	10.6%		
③ どちらとも言えない	31	11.7%		
④ あまりしていない	75	28.4%		
⑤ していない	119	45.1%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q30 ゴールの見通しを立てながらのごとを進めていくことができますか。

	人数	%		
① できる	36	13.6%		
② どちらかと言えばできる	135	51.1%		
③ どちらとも言えない	59	22.3%		
④ あまりできない	29	11.0%		
⑤ できない	5	1.9%		
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q31 自分が失敗または成功をしたときに、その原因を分析してこれからは生かそうとしますか。

	人数	%		
① する	81	30.7%		
② どちらかと言えばする	148	56.1%		
③ どちらとも言えない	21	8.0%		
④ あまりしない	14	5.3%		
⑤ しない	0			
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q32 相手と意見が違ったときにも冷静に相手の話の耳を傾けることができますか。

	人数	%		
① できる	131	49.4%		
② どちらかと言えばできる	112	42.3%		
③ どちらとも言えない	15	5.7%		
④ あまりできない	6	2.3%		
⑤ できない	1	0.4%		
合計	265			
①	②	③	④	⑤

Q33 他人の話を聞くときに、自分なりの疑問や批判を持ちますか。

	人数	%		
① 持つ	135	51.1%		
② どちらかと言えば持つ	96	36.4%		
③ どちらとも言えない	27	10.2%		
④ あまり持たない	6	2.3%		
⑤ 持たない	0			
合計	264			
①	②	③	④	⑤

Q34 学習していることが、身の回りの課題や社会課題の解決に結びつくかどうか考えられますか。

	人数	%		
① ある	79	30.0%		
② どちらかと言えばある	94	35.7%		
③ どちらとも言えない	55	20.9%		
④ あまりない	32	12.2%		
⑤ ない	3	1.1%		
合計	263			
①	②	③	④	⑤

Q35 自分と違う考えや習慣、文化を持った人と接することは楽しいと思いませんか。

	人数	%		
① 思う	139	52.5%		
② どちらかと言えば思う	90	34.0%		
③ どちらとも言えない	30	11.3%		
④ あまり思わない	6	2.3%		
⑤ 思わない	0			
合計	265			
①	②	③	④	⑤

課題研究について

【自分自身の取り組みについて】

Q2 友達と協力しながら、自ら積極的に活動できたか。

	人数	%		
① 出来た	116	45.3%		
② ほぼ出来た	100	39.1%		
③ どちらとも言えない	26	10.2%		
④ あまり出来なかった	8	3.1%		
⑤ 出来なかった	6	2.3%		
合計	256			
①	②	③	④	⑤

Q3 活動内容の指示が明確で分かりやすかったですか。

	人数	%		
① 良い	99	38.7%		
② ほぼ良い	122	47.7%		
③ どちらとも言えない	24	9.4%		
④ あまり良くない	8	3.1%		
⑤ 良くない	3	1.2%		
合計	256			
①	②	③	④	⑤

Q5 全体として良い授業でしたか。

	人数	%		
① 良い	100	38.9%		
② ほぼ良い	122	47.5%		
③ どちらとも言えない	28	10.9%		
④ あまり良くない	4	1.6%		
⑤ 良くない	3	1.2%		
合計	257			
①	②	③	④	⑤

活動全般を通して

【自分自身の取り組みについてあてはまるものを選んでください。】

Q6 議論や分析を通して、理解を深めることを体験した。

	人数	%		
① 当てはまる	116	45.1%		
② やや当てはまる	110	42.8%		
③ どちらとも言えない	23	8.9%		
④ あまり当てはまらない	6	2.3%		
⑤ 当てはまらない	2	0.8%		
合計	257			
①	②	③	④	⑤

Q7 研究開始当初、自分が思い浮かばなかったような提案を行うことができた。

	人数	%		
① 当てはまる	70	27.2%		
② やや当てはまる	86	33.5%		
③ どちらとも言えない	55	21.4%		
④ あまり当てはまらない	34	13.2%		
⑤ 当てはまらない	12	4.7%		
合計	257			
①	②	③	④	⑤

Q8 独自の視点やアイデアを見つける手法が身についてきた。

	人数	%		
① 当てはまる	52	20.2%		
② やや当てはまる	114	44.4%		
③ どちらとも言えない	53	20.6%		
④ あまり当てはまらない	34	13.2%		
⑤ 当てはまらない	4	1.6%		
合計	257			
①	②	③	④	⑤

Q9 学校外での対話(国内・社会人や大学生を想定)することに慣れた。

	人数	%		
① 当てはまる	75	29.2%		
② やや当てはまる	108	42.0%		
③ どちらとも言えない	47	18.3%		
④ あまり当てはまらない	19	7.4%		
⑤ 当てはまらない	8	3.1%		
合計	257			
①	②	③	④	⑤

情報収集能力・活用能力・発信能力について

【自分自身の取り組みについてあてはまるものを選んでください。】

Q10 自らの情報収集を通して、課題研究を深めることができた。

	人数	%		
① 当てはまる	149	58.2%		
② やや当てはまる	87	34.0%		
③ どちらとも言えない	15	5.9%		
④ あまり当てはまらない	3	1.2%		
⑤ 当てはまらない	2	0.8%		
合計	256			
①	②	③	④	⑤

Q11 課題研究や探究学習における情報収集能力が高められた。

	人数	%		
① 当てはまる	115	45.1%		
② やや当てはまる	109	42.7%		
③ どちらとも言えない	25	9.8%		
④ あまり当てはまらない	4	1.6%		
⑤ 当てはまらない	2	0.8%		
合計	255			
①	②	③	④	⑤

Q12 プレゼン作成時に、持っている情報の意味(現状説明、理田付け、具体例等)を考える。

	人数	%		
① 当てはまる	126	49.2%		
② やや当てはまる	97	37.9%		
③ どちらとも言えない	28	10.9%		
④ あまり当てはまらない	3	1.2%		
⑤ 当てはまらない	2	0.8%		
合計	256			
①	②	③	④	⑤

NGP全体について

Q15 今年度のNGPの活動は、あなたにとって有意義でしたか。

	人数	%		
① 有意義	103	40.2%		
② ほぼ有意義	109	42.6%		
③ どちらとも言えない	31	12.1%		
④ あまり有意義がない	9	3.5%		
⑤ 有意義がない	4	1.6%		
合計	256			
①	②	③	④	⑤

あとがき

本校に赴任して、良い意味で意外だったのが生徒たちの雰囲気だ。進学校ということで、極端に表現すると、シャーペンの芯が紙をこするカリカリという音が微かに響いている、というイメージを持っていた。しかし、始業式の日になると、久しぶりに級友に会えたことが嬉しいのだろう、生徒たちの笑い声が校舎にこだまし、教務室にいても他の教室の生徒達の喧騒が伝わってくる。コロナのこの時代なので、マスクをしていたにしても、もっと小さい声で話せば良いのに、と冷や冷やしたことを覚えている。生徒たちは良く挨拶をするし、駅伝大会やクラスマッチの選手宣誓では、宣誓の前に漫才をするし（クラスマッチの宣誓前の漫才は5分くらい続いたと思う）、生徒に何か話しかけると、とてもレスポンスよく返事が返ってくる。学業以外の部分でも、班活動やコンテストで個性ある成果を挙げている。色々な所で、生徒たちがパワフルであることや、積極的であること、表現力や発信力があること、大変活発であることに驚かされた。それは、本校の昔からの気風というものもあるだろうし、毎朝昇降口で生徒たちに「おはよう！」と挨拶している校長先生の影響もあるだろうし、生徒たちが元々持っている資質による所も大きいだろう。しかし、何か月かして感じたことは、生徒たちの積極性や発信力の高さは、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」によって培われた所が大きいのでは無いか、ということだ。課題研究をするにあたって、課題を設定し、グループの仲間と話し合って計画を立て、担当の先生と相談し、外部の機関にアポイントを取り、出向いてインタビューをし、仲間と考えて内容をまとめ、資料を作り、プレゼンをする。そういった過程でコミュニケーション力や交渉力、プレゼンテーション力や積極性、発信力が育たない訳がない。同様のことが台湾との交流や立命館アジア太平洋大学での交流などでもあり、事業を通して生徒は様々な能力を身に付けていく。そして、それこそが本事業の目的であると言える。本事業の目的の一つは「グローバルファシリテーターの育成」であって、課題研究発表をすることではない。発表は手段であって、そういった活動を通して、情報活用能力、対話力、協働する力、計画を実現に導く力を付けることが目的だ。そういった意味でも、本事業は大きく成功していると感じる。生徒達が身に付けた力や気風は、この3年間、SGHの時から数えて8年間だけのものではなく、本校の校風として残り、今後の生徒達に永く恩恵をもたらす財産であると思う。

上に述べた、「生徒たちの積極性や発信力の高さは、本事業によって培われた所が大きいのでは無いか」と思った理由は、挨拶の面や積極性、発信力といった面で、1年生よりも3年生の方が良いからだ。これは、1年生のことを悪く言っている訳では無い。3年生の方が本事業を長く行って、その分積極性や発信力が付いているのだと思う。少し話は逸れるが、クラブ活動などでも、1年生だけがやたら大きな声で挨拶をしていて、3年生がふんぞり返っているのは良くないと思う。しっかりとそのクラブで礼儀や協働を学んでいれば、長く学んでいる3年生の方が礼儀がしっかりとしているべきだ。同じように、本事業によって培われた生徒たちの活力は本校の気風を良くし、それは年月が経つほど本校を良くしていかなければならない。本事業は今年度で終了したが、その効果は今後も永く本校に根付くものになると感じているし、また、そうしなければならない。

（教頭 内藤 信一）

令和3年度
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）
研究報告書

2022年（令和4年）3月31日 発行

発行者 長野県長野高等学校

〒380-8515 長野県長野市上松1丁目16-12

電話 026(234)1215（代） FAX 026(234)3500

ホームページ <http://www.nagano-c.ed.jp/naganohs/>

令和元年度（2019年度）指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
（グローバル型）

NAGANO GLOBAL PROJECT

課題研究集録

～グローバルな視点で長野の2030年を考える～



令和4年3月

長野県長野高等学校

2021 年度の活動を振り返って

今年度は国の3年間の指定事業の最終年度であり、SGH の時代から続く8年間に渡る「新しい学び」の集大成の1年間であった。また、今年度より1、2年生全員に1人1台端末が配布され、校内のWi-Fi環境が整備されたことでNGP活動のやり方も従来とは大きく変化した。一方で、今年度も新型コロナウイルスの感染拡大の収束の見通しが立たず、当初の計画は大きく崩れ、昨年度と同様に大幅に計画を見直さざるをえなかった。オンラインを中心とした代替行事を企画したが、対面での交流と同様の効果を得ることは難しいと考えていた。しかし、生徒の高い意識を持った取り組みにより、オンラインならではの新しいスタイルを確立することができた。

今年度の研究集録には、3年生はポスタープレゼンと論文、英語エッセイ、2年生と1年生は課題研究のスライドを掲載した。3年生は年度当初に国際会議、ポスタープレゼン、英語エッセイの中から自分が中心に取り組みたいものを1つ選んだ。国際会議選択者を中心に5月にSDGs地方創生国際会議「グローバルアカデミア2021」を開催した。多様な参加者を集めて実施するこの会議は、学校の外に主体的に関わり、かつ協働的にプロジェクトを作り上げる経験を持つ3年生NGP選択者たちであったからこそ実現できた。課題研究、英語エッセイの選択者は7月の文化祭での発表・展示を目指して取り組んできた。3年生の取り組みは令和3年12月発行の「国際会議グローバルアカデミア報告書2021」に収録されているので、本冊では成果の一部を掲載した。

2年生は、「個別研究」に形式を変更して2年目であった。その効果なのか、例年以上にNGP活動に意欲的に取り組む姿が見られた。また、先日実施したNGPアンケートでは、今年度取り組んでいる研究テーマに関連する分野への進学を考えている生徒が大幅に増加した。今回掲載した研究はどれも自分らしさを十分に表現できていた。代表者の発表会を毎年参観いただいている東京海上日動火災保険株式会社、信州大学教育学部、同工学部、長野県立大学の方からも、確実にレベルが上がっているという評価を頂いている。

1年生は、感染拡大の影響で今年度の課題研究中間発表会が2回に渡り延期になり、今年度中の実施ができなかったが、このような状況の中でも生徒はモチベーションを維持しながら研究を継続した。発表会の日程が伸び、例年より研究の時間が確保されたこともあり、掲載したスライドも含め、見どころのあるものが多い。

今年度で国の指定事業は終了するが、来年度もNGP事業は実質的には継続し、さらなる深化、発展を目指す。課題研究では、従来の流れも踏まえつつ生徒の進路希望に関連した研究の充実に力をいれたい。国際交流では、オンラインを中心とした取り組みの中で、継続的な交流を模索したい。最後に本校のNGP事業に意欲的に取り組んだ生徒たちに感謝すると共に、SGHの時代から本校のSGH事業・NGP事業を支援していただいた全ての皆様にこの場を借りて、心から御礼を申し上げます。

NGP 推進室主任
海沼 孝典

目 次

第1章 3年生課題探究 グローカルアカデミア

(1) English Essays

Don't Take It for Granted	1
Why do we learn Japanese?	3
My life with animals	4
How Do You Live?	5
WE HAVE TOO MANY REFRAINS	6
We can improve our environment little by little	7
Two Spirits	8
Encouragement of handkerchieves	9

(2) 論文・ポスター制作

よりよい共生を障がい者雇用から考える 県内の課題と対策	11
しなの鉄道の案内表示に関する補充研究	17

第2章 2年生課題探究～SDGs から見た長野のグローバル戦略

地球温暖化を減速?!～ミドリムシに秘められた可能性～ (スライド)	21
動物園における環境エンリッチメント (スライド)	25
公共施設マネジメント～廃れる街と膨れるインフラ負担～ (スライド)	31
持続可能な観光業とは (スライド)	36
高校生だからこそできる町おこし施策 (スライド)	40
高校生がつなぐ長野コンパクトシティ (スライド)	45

第3章 1年生課題探究～長野のグローバル戦略を探る

2組D班 コロナ禍の観光・経済への影響 (スライド)	53
7組E班 台風19号の前と後 (スライド)	56
7組F班 長野県の水は美味しいの? (スライド)	59